山口大学大学院東アジア研究科
博士論文

横光利一前期文学の典拠と思想

令和五年十二月二十五日
英荘園

目次

序　章　モダニズムの横光利一　1
第一節　文学史における横光利一　6
第二節　横光利一の史的評価の問題点　11
第三節　本研究の方法と構成　16
第一章　横光利一「無常の風」論――天地人の文学――
第一節　問題提起　20
第二節　フェリーの犯罪学　21
第三節　フェリーの社会学　26

第四節　犯罪学の横光文学　32
第五節　家相学の横光文学　34
第六節　地形学の横光文学　36
第七節　結論　37

第二章　「マルクスの審判」の典拠と改稿

第一節　問題提起　41
第二節　「殺人者」の本文分析　42
第三節　典拠としてのフェリーの犯罪学　48
第四節　「マルクスの審判」の本文分析　50

第五節　「マルクスの審判」の主題　55
第六節　結論　58

第三章　横光病妻小説の思想と方法

第一節　問題提起　61
第二節　自然と運命の関係　63
第三節　病妻小説における運命観　66
第四節　「美しい家」の本文分析　68
第五節　「花園の思想」の本文分析　73
第六節　結論　77

第四章　横光利一「機械」と『化学本論』
第一節　問題提起　81
第二節　化学用語と作業工程の典拠　82
第三節　〈機械〉の正体　87
第四節　登場人物の狂人化　90
第五節　認識のメカニズム　93
第六節　結論　98
終　章　横光利一の思想と文学
第一節　西洋摂取の姿勢　101

第二節　東西洋思想の融合　103
第三節　結論と展望　105

序章　モダニズムの横光利一

第一節　文学史における横光利一

横光利一は、一八九八年（明治三十一年）に生まれ、一九四七年（昭和二十二年）に没する日本の小説家・俳人・評論家である。大正から昭和にかけて活躍し、その作品は新感覚派あるいは新心理主義と呼称され、日本モダニズム文学の代表的存在とみなされてきた。いっぽうで、西洋の流行を追いかけ、変節の多い作家という評価もある。

一九二四年十月、横光利一・川端康成・片岡鉄兵・中河与一を主要メンバーとする同人によって、『文芸時代』が創刊された。翌月、千葉亀雄は、『世紀』において、『文芸時代』の同人を次のように評している(1)。

> さうして彼等が、さうした芸術の傾向に、特殊な悦こびを感ずるのは、彼等の心理機能が、何よりも、気分や、情調や、神経や、情緒やに最も強い感受性を持つからであり、そしてそれは、文化の芸術が、当然そこまでに導かるべき内部生命を持つからである。で、彼等の感覚の新らしさに、そして生々した飛躍さは、当然新しい文化人にそれを鑑賞する悦びを感ぜしめる。その点においてこの「新感覚派」はもつと早くから当然起るべき筈のものであり、またたとへ多少それが遅れたにしても、いはゆる「文芸時代」派の人々の持つ感覚が、今日まで現はれたところの、どんなわが感覚芸術家よりも、ずつと新らしい、語彙と詩とリズムの感覚に生きて居るものであることはもう議論がない。

千葉亀雄は、「「文芸時代」派の人々」に斬新な文学の感覚を認めて、彼らを「新感覚派」と命名する。従来、これを以て、日本文学史上に「新感覚派」というエコールが誕生したと理解されてきた。

一九四九年、平野謙は、『概説現代日本文学史』において、新感覚派文学の出現について、次のように分析している(2)。

新感覚派文学もマルクス主義文学も、ともに自然主義以来の素朴実在論的なリアリズム文学に反抗して立つたことにおいて共通していた。一は技法上の文革命を中心に、他は世界観上の革命文学をめざしつつ、既成の文学伝統を打破せんとする前衛的な文学運動であることにおいて、それは軌を一にしていた。その社会的地盤としては、第一次世界大戦から関東大震災を背景とするアナーキスティックな芸術破壊の運動を一つの淵叢としていた。それが一は新感覚派文学として結晶し、他はマルクス主義文学にまで晶化したのである。したがつてこの二つの文学エコールは昭和文学をして昭和文学たらしめる二大流派にほかならない。

平野謙は、新感覚派文学をマルクス主義文学と併置し、両者の出現を、「既成の文学伝統」であるリアリズム文学への反抗と見なした。その背景に、第一次世界大戦や関東大震災を契機として勃興する「アナーキスティックな芸術破壊の運動」を「社会的地盤」として認めている。その一年後、伊藤整は、平野謙の言説を参照しつつ、『現代日本小説大系』第四十三巻の「解説」において、新感覚派文学の出現について、次のように分析している(3)。

日本の社会の不安な条件が相次いでこの時期から現れた。大正九年の「日本社会主義同盟」の結成、大正十一年の金融危機、大正十二年の関東大震災等がそれである。社会秩序の動揺を背景として新しい文学の芽が起つて来た。その一つは階級意識の明確化に伴つて起つた階級思想と文学との結びつきであり、もう一つは、資本主義の強化に伴ふ生活意識の近代化を反映する文学形式の革新運動であつた。前者の萌芽が大正十年二月秋田の土崎港で創刊された「種蒔く人」であり、その発展したものが大正十三年（一九二四年）九月から発行された「文芸戦線」となつてプロレタリア文学の母胎を作り出した。後者は同じ大正十三年十月に創刊された「文芸時代」である。この雑誌が新感覚派文学の母胎となつたのである。（中略）その意味では「文芸戦線」と「文芸時代」とは同時期に出発した対立する二つの流派、プロレタリア文学系とモダニズム文学系の出発点になつたのである。（中略）

当時の新しい文学者が広くこれ等の新傾向芸術の影響下にあつたことは、アナーキストの詩人の群にも見て取ら

れるのである。

伊藤整は、日本社会主義同盟の結成や金融危機・関東大震災による「社会秩序の動揺」を背景として指摘し、新感覚派を「資本主義の強化に伴ふ生活意識の近代化を反映する文学形式の革新運動」と位置づけた。さらに、新感覚派を「モダニズム文学系の出発点」と捉え、西洋の「新傾向芸術の影響」も指摘している。

一九五六年、平野謙は、『昭和文学入門』において、自説をさらに展開させる(4)。

> 昭和時代の新文学はそのような既成文壇に対する反抗の声としてまず特色づけられるが、その反抗の叫びは第一にいわゆるプロレタリア文学のがわから、第二にいわゆる新感覚派文学のがわから起った。前者を一個の文学運動と呼ぶとすれば、後者はむしろ一個の文学流派にすぎぬともいえようが、両者ともども既成文学の打倒、新文学の樹立をめざしていた点では、おなじ方向をめざしていた、といい得る。しかし、重要なことは、ともに大正末期に発生した二つの文学――プロレタリア文学と新感覚派文学とが、私小説を中心とする既成のリアリズム文学を打倒するために、いわば共同戦線を敷くというかたちにならないで、両者ともおたがいを論難攻撃しあった、という事実だろう。(中略)
>
> ここに昭和初年代の文学界の最大の特徴がある。それは簡明な二派抗争の歴史ではなく、いわば三つ巴の三派鼎立の歴史にほかならなかった。

平野謙は、昭和初期の文学史を、新感覚派文学とプロレタリア文学による既成文学への「抗争の歴史」としただけではなく、新感覚派文学とプロレタリア文学が「おたがいを論難攻撃しあった」と主張する。すなわち、自然主義に立つ既成文壇に、新興勢力であるプロレタリア文学・新感覚派が並び立つ、「三派鼎立」説である。昭和文学史は、この「三派鼎立」説を基軸として、徐々に形成されてゆく。横光利一の史的評価も、新感覚派の史的評価と共に定着していくと言える。

ところで、一九三〇年九月、横光は、小説「機械」を発表している。翌月、瀬沼茂樹は、「心理主義の発展とその帰趨」

において、「新しい心理文学の特色」について、次のように評論した(5)。

いま、これらの新しい心理文学の特色を概説すれば、心理過程をもはや求道的精神によって統一的に追求することを意識的に拒絶したがために、もはや人間心理をその奥にある実態と考えられるものから切りはなして、かえってその心理過程をできうるかぎり細微な時間的系列に分解し、その個々の分解されたものの単なる配置において、すなわち内容から切りはなされた形式についてかえって人間の実体をとらえられると考え、時代精神から耳をふさぎ、このような機械的な心理描写に安心することができたのである。横光においても、川端においても、伊藤においても、人間の実態をさぐることにおいて、たとえば、個人主義的世界観から独立している、換言すれば人間を、全生活意識から切りはなして心理的存在とし、生理的存在としてみるフロイト流の生物学的精神分析は、まことに、この目的のためには便利なものではあるが、実は個人主義的世界観の根本的破綻にもとづき、現実生活と理想生活との中間に、ある一種の享楽生活を営んでいるものにほかならないのである。

「機械」発表の直後、瀬沼が、「機械」を同時期の川端康成・伊藤整の心理小説と一括して、「フロイト流の生物学的精神分析」を用いた作品と指摘していることに注意しておきたい。

一九四一年、春山行夫は、『現代世界文学概観』において、「機械」について、次のように言及する(6)。

「内的独白」は作者自身の意識を追及する「自動的記述」とちがつて、小説家が作中人物の意識に流れるものを、外部から説明的に描写しないで、直接に作中人物の意識に反映したものとして表現する方法である。これは横光利一氏の『機械』などにもとりいれられ、我国の小説界を一時風靡したことがあつたが、それが最も完全なかたちに於いて表現されたものは、ジョイスの『ユリシイズ』の最後の挿話であつた。

「機械」における「内的独白」に注目した春山は、それを「作中人物の意識に流れるものを」「直接に作中人物の意識に反映したものとして表現する方法」と考える。そして、横光が、その「方法」をジョイス『ユリシイズ』から摂取したように述べている。

一九五〇年、伊藤整は、『ユリシーズ』模倣説をさらに発展させる(7)。

横光利一は昭和五年突然変化した。それは『改造』の九月号にのった「機械」である。「ユリシーズ」の翻訳が現れると同時であり、それは明かに『文学』にのったプルウストの影響であった。私は牛込の電車道を歩きながら買ったばかりの雑誌で「機械」を読み出した時、息がつまるような強い印象を受けた。あの新感覚派流の印象を跳ね飛びながら追う「上海」までの手法を突然彼はやめ、柔軟な、谷川徹三の所謂「唐草模様」的な連想的方法を使い、文体も切れ目なく続いて改行のほとんど無い、活字のぎっしりつまった形になっていた。(中略)それが『詩と詩論』が二年前から執拗に紹介していたフランスやイギリスの新文学の影響を受けているとする批評は、不思議な位見られなかった。正確に言えば横光は新しい方法を採用して、それを充実させうる円熟した思想を育てていた。方法を自分のものとして駆使する実力を持っていた。新心理主義の傾向は『文学』と『詩と詩論』と『詩・現実』による西欧文学のスタイルの影響である。

伊藤整は、横光の文学が昭和五年に「突然変化した」とし、「機械」を『ユリシーズ』の模倣作と断言する。その上で、自らが提唱した新心理主義文学と横光の突然変異を結びつける。伊藤整の言説を整理すれば、横光の文学は、「新傾向芸術の影響」を受けた新感覚派から、『ユリシーズ』を模倣する新心理主義文学に移行したことになる。この伊藤の言説以降、横光は、新心理主義文学の代表作家として理解されていく。

以上を顧みれば、現行の昭和文学史における横光の評価は、一九五〇年前後、伊藤整・平野謙を中心とする文芸評論家によって、文学史に位置付けられたと言ってよいだろう。新感覚派・新心理主義など、名称は様々であるが、いずれも、西洋の流行に追随したという点では一致している。それゆえに、横光は、日本モダニズム文学の代表として文学史に定着していく。しかし、文芸評論家による文学史は多分に主観的かつ印象評価的である。文学研究の立場に立つとき、従来の昭和文学史を相対化しつつ、個々のテキストに向きあう必要がある。

第二節　横光利一の史的評価の問題点

一九三〇年六月、横光自身は、エッセイ「どんな風に発展するか」において、モダニズムについて、次のように評価している(8)。

ナンセンス文学、モダニズム文学――などといふ馬鹿馬鹿しい名称はつけない方がいい。

川端康成が「モダニズム」といふ言葉を使ふ一の神経を疑ふと言ふと言つた。非常に面白く思つた。

横光は、「モダニズム文学」に対して、「馬鹿馬鹿しい名称」と断じ、明らかに拒絶の態度を示しているのである。

また、片岡鉄兵と横光は、一九三二年七月に発表された『文芸時代』座談会」において、新感覚派という命名について、次のように述べている(9)。

片岡　併し新感覚派には理論はなかつたね。あれはたゞ勘で行つただけの話ですよ。だから自信がなかつた。

記者　それから新感覚派といふ何をつけられたので、同人の方々も意識して、新感覚派の称号と手法を使はれ出したといふことはなかつたですか。

横光　いやさうでもなかつた。新感覚派といふ名前をつけられたので、新感覚派だといつて僕は大にやつつけられた。だから一種の意地でその儘その名前をとつてしまつた形です。意地でやつたのですね。

「新感覚派には理論はなかつた」とする片岡に、横光は、「新感覚派という名前を」他人から「つけられ」、「大にやつつけられた」と回想している。ここに「新感覚派」という名称が外発的命名であることは明らかであり、横光が「一種の意地で」その名称を使い続けたことも告白されている。

一九五〇年、中河与一は、「新感覚派の運動」において、次のように述べる(10)。

新感覚派運動といふものを今から顧みて、何がその特長であつたかといふと、格別の思想的根拠もなかつたと思

ふし、それが今日の時代にどんな影響を残してゐるかと考へみると、格別のものは無かつたやうな気がする。

中河も、新感覚派には「格別の思想的根拠」がないと認め、何の影響も残していないと考えている。『文芸時代』の主要メンバーである片岡・横光・中河の三人とも、新感覚派を自らの拠って立つエコールとしては自認していなかったのである。

同年、那須辰造は、「新感覚派の文章」(11)において、新感覚派に「文学の基盤である人生や社会の問題について共通の主張」を認めず、それを「エコール」としつつも、「文学運動」とは言えない、一「グループの傾向」と位置づけている。

一九五七年、小田切秀雄は、「新感覚派の成立」(12)において、新感覚派が「文学運動としての明瞭なイデーやプログラムをもたなかった」、「流派としてのまとまった主張の自覚さえ弱かった」と述べた。

一九六六年、瀬沼茂樹は、「新感覚派と新興芸術派」(13)において、新感覚派を、「ジャーナリスティックな批評用語としてはじまったもの」と考え、「一つの文学流派」として、「近代日本の文学史上の或る事象」とすることは、「改めて学問的に検討してみなければならない」と主張した。

文芸評論家による呼称や文学史的評価に疑義が呈される中、一九六七年、栗坪良樹は、「千葉亀雄と横光利一――「新感覚」理論の意味と内実」(14)において、新感覚派を、「明確な理論的位置づけ」がない、「自覚と内実の持ち合わせはなかった」グループと断言している。

この流れを受け、一九八二年、デニス・キーンは、『モダニスト横光利一』(15)において、新感覚派の現象を、「雑誌の自由を求める若い作家」による自己宣伝のための文壇ジャーナリズムとして理解する。文壇の注目も批判も、横光一人に向けられていたと分析し、「新感覚派というグループは決して存在しなかった」と明言した。

一九八八年、田口律男は、「反転する都市」(16)において、新感覚派を「外発的な文学運動」とし、「共通の理念のもとに結集したエコールではなかった」と結論づけた。

横光利一は、平野謙・伊藤整による評価を受けて、「新感覚派」という名称のもと、日本モダニズム文学の代表として文学史に定着していった。しかし、横光を含む『文芸時代』の同人たちが新感覚派というエコールの存在を否定している点に、今改めて注目したい。平野謙・伊藤整が昭和文学史を構築したのと同時期に、那須辰造・小田切秀雄などの文学者・文芸評論家も、エコールとしての新感覚派の存在を否定していた。以後、瀬沼茂樹・栗坪良樹・デニス・キーン・田口律男などの研究者も、新感覚派の存在を否定していく。文学史と研究史の分岐点は、平野の「三派鼎立」説にあるようである。

平野謙「三派鼎立」説は、「新感覚派」が一エコールであることを与件として設定し、昭和文学の発端を、新感覚派とプロレタリア文学と既成リアリズムの「三派鼎立」に求めるものであった。

一九六六年、吉本隆明は、『言語にとって美とはなにか』(17)において、「文学のもんだいを文学者の徒党の消長にすりかえた文学理論と文学運動論」を「文学史の整理に用いるのも誤り」と考える。作品に即せば、プロレタリア文学とブルジョア文学の区別が認めがたい以上、「三派鼎立」説のような「区分け法」は文学史の整理として成立しないと主張する。

一九七七年、栗坪良樹は、「横光利一と志賀直哉」(18)において、「三派鼎立」説について、「文学史の流れの内に構図化してしまうことによって」、文学の内実は、「通説化されてしま」い、「通説に疎外されて再びあいまみゆることを困難にさせている」と論じ、「文学史の概念が先にあって、そこから作家の特質を捉えようとするがゆえに、評価は通説以上にはなっていない」と厳しく批判している。

一九八九年、羽鳥徹哉は、「前衛芸術、その受容と展開「その一」―新感覚派への道筋―」(19)において、「これまでの昭和文学史観として最も強い影響力を持ったのは平野謙の昭和文学史」と述べ、「政治と文学という問題意識で昭和文学を捕らえる」「三派鼎立」説の影響で、新感覚派は、「実はどうでもいいものとして脇へ追いやられてしま」い、「思想や認識をからませない単なる珍奇な表現の文学と」理解されてきたことを論証した。

一九九一年、菅野昭正は、『横光利一』(20)において、「三派鼎立」説について、「個々の作品の内側をすこし深く探ろう

とすると、その効用はかならずしも保証の限りでない」と主張する。

以上の諸論が説くように、「三派鼎立」説の問題は、研究対象である文学作品そのものを検討せず、作品外部の時代環境と政治的視点からその本質を見極めようとしたことにある。「新感覚派」はエコールとして認識され、それに伴って、他の言説が疎外され、「思想や認識をからませない単なる珍奇な表現の文学」という認識が定着していく。横光文学への認識も、「三派鼎立」説の影響から逃れられなかった。横光を新心理主義と結びつけ、新感覚派から新心理主義への転向という見方を決定づけた伊藤の言説にも同種の問題が潜んでいる。

一九六六年、保昌正夫は、『横光利一』(21)において、横光の「突然変化」について、「機械」が『上海』における「海港章」と「婦人」の間に提出されたもの」と指摘し、さらに、「「機械」と「上海」とはまったく異質の作」ではないと主張した。これは、横光「突然変化」説への「是正」を求める説でもあった。

一九八六年、田口律男は、「横光利一「機械」論―ある都市流入者の末路」(22)において、横光の「突然変化」という「簡略な見取り図が何の反省もなしに用いられる傾向」を批判しながら、それを「横光文学の軌跡を表現的にしか辿らないものの臆説に過ぎない」と分析している。

横光「突然変化」説は、時期的・内容的に、成立し得ないものであった。では、横光と新心理主義にはどのような問題があるだろうか。

一九三一年六月、横光は、「心理主義文学と科学」において、心理主義文学について次のように述べている(23)。

> 新しい心理小説とはどういふものかと云へば、多くの人々は科学をとり入れたものだと思ふらしい。だがそれは間違ふやうになる。文学の邪道へそれてしまふのだ。文学はどこまでも文学であつて、とふところの科学そのものではない。フロイドの精神分析学を引つぱつて来て文学に応用したつてそれはどこまで真実として頼れるのか分かるものではない。

横光は、瀬沼の評論への返答とも思えるこのエッセイにおいて、「新しい心理小説」を「文学の邪道」と批判し、「フロ

イドの精神分析学を引つぱつて来て文学に応用」することを明確に否定している。

一九三二年五月、横光は、「現実界隈」において、「ユリシーズ」と「失ひし時を求めて」について、次のように批評する[24]。

「ユリシーズ」や「失ひし時を求めて」の企ては甚だ簡単なものである。ただあれほどの馬鹿なことを誰もする気が起こらなつただけなのだ。一日中の人間の行動を一日かかつて撮映することは、鳩の音を打さんとするとき本物の鳩を使ふ擬音の脱法行為とどこが違ふのであらう。

横光は、「ユリシーズ」と「失ひし時を求めて」を「甚だ簡単な」「企て」とし、「あれほどの馬鹿なことを誰もする気が起こらなつた」と批判している。

「機械」が発表された当時、横光は、「新しい心理小説」に対しても、「ユリシーズ」に対しても、批判的な姿勢をとっていた。にもかかわらず、一九五〇年代、伊藤整によって、「機械」は、新心理主義文学として位置づけられてしまう。

一九六二年、松村剛は、『春は馬車に乗って・機械』[25]の「解説」において、「プルウストは心理追求のはてに、実在に到達できると信じていた作家」とし、「横光は心理のかけひきを一つの模型図としてあらわそう」としたと考える。しかし、「二つはそもそもの方向が逆なので」、「「機械」にプルウストの影響をみとめ」る「批評家」の言説を「妄言」と批判し、「「機械」にプルウストを見る評者」を、「この小説に自己の陣営の希望を見たかった」人と判断した。「批評家」「評者」が伊藤整を指示することは言うまでもない。

一九六三年、日沼倫太郎は、「虚構への意志」[26]において、日沼は、「横光とプルーストのあいだにはいかなる同質性も見出し得ない」と述べながら、プルーストを「機械」の下敷きとすることを「冗談」と断じている。

一九八一年、曾根博義は、「「機械」と「水晶幻想」」[27]において、「「機械」の文体にプルーストの影響を認めることはきわめて難しい」と主張する。

一九八八年、桂秀実は、『探偵のクリティック』[28]において、「機械」は、「ジョイス的な意味での内的独白、あるいは

意識の流れの記述」ではないと否定しながら、『ユリシーズ』最終章のいわゆる内的独白の斬新さに衝撃を受けた伊藤整」が「日本におけるその等価物を見出そうとして」、「「機械」を「世界的同時性」のなかに位置づけようとした」と推測し、「機械」と「ユリシーズ」の関係性を伊藤整の「誤解」と解釈している。

「機械」を新心理主義文学の代表作とすることの是非は、横光のいう「邪道」、後世の文芸評論家・文学研究者のいう「妄言」「冗談」「誤解」などの評価によって明らかであろう。

横光を日本モダニズム文学の代表として位置づける昭和文学史は、一九五〇年代前後、伊藤整・平野謙などの文学者・文芸評論家によって作られたものであり、作品分析に基づいた考察の結果ではなかった。横光は、モダニズムと新心理主義文学に対して、そもそも批判的な態度をとっていた。エコールとしての新感覚派は、存在しないものであった。伊藤整のいう横光の「突然変化」にも、根拠はなかった。そして、横光と新心理主義文学の関連性も伊藤によって強引に結びつけられたものであった。つまり、横光文学にはモダニズムとしての地盤は、そもそも存在しないのである。

第三節　本研究の方法と構成

横光文学をモダニズムとして位置づける見方は繰り返し批判されてきたにもかかわらず、いずれの批判も、昭和文学史を覆し得るほどの支持を得られていない。その原因は、それぞれの批判が、抽象的かつ断片的論述に留まっていることに求められよう。研究者は、文芸評論家の作った昭和文学史に代わる理論をいまだ示し得てない。従来の評価を明確に批判し、新しい横光利一像を提出することは、文学史の大きな課題と言える。

伊藤整・平野謙が作った文学史は、時代と社会の変遷を与件として設定し、それらを作品の本質と結びつける方法をとった。作品の内容は十分に検討されないまま、結論が先に決めつけられ、結論以上の論述は展開されていない。しか

し、その与件として設定された時代状況は、文学作品と同じく、検討される余地のある課題であり、ただちに真理として作品解釈に使えるものではない。文学作品も時代を構成する一部であり、その研究を通して、むしろ時代認識を刷新する力があると考えられよう。

このような問題意識に立てば、文学研究の方法は、正面から作品を分析することに尽きると言えよう。文学を検討の対象とする以上、実在する文学作品を第一に分析すべきことは言うまでもない。時代状況や他分野の理論で作品を解釈する必要がある場合でも、それは必ず作品の中にそれとの関係性が示されていなければならない。時代状況や他分野の理論は、世界に対する解釈の汎用性を持ち、作品解釈においても、一見合理的である。しかし、作品との関係性がたどれないとき、解釈の可能性は無限に無秩序に広げられ、実証的研究としては成立しない。

本研究では、横光の前期作品の分析を通して、文学史の時系列に沿って、総合的に横光本人を再評価することを目指している。方法としては、横光のテキストについて典拠を具体的に指摘しつつ、思想の痕跡を確認する。

以上の問題意識と研究方法に基づき、本研究を以下のように構成する。

第一章「横光利一「無常の風」論――天地人の文学」では、横光のエッセイ「無常の風」(『文藝春秋』、一九二五年九月)を考察する。

第二章「「マルクスの審判」の典拠と改稿」では、横光の小説「マルクスの審判」(『新潮』、一九二三年八月)を検討する。

第三章「横光病妻小説の思想と方法」では、横光の実体験に基づく病妻小説群を取扱う。

第四章「横光利一「機械」と『化学本論』」では、新心理主義文学の代表作とされた「機械」(『改造』、一九三〇年九月)を検討する。

本研究で取り扱う横光のテキストは、一九二三年から一九三〇年までに発表されたものである。横光が「新感覚派」と呼ばれる以前から、「突然変化」によって「新心理主義」に転じたとされる「機械」までの時期を本研究の対象とし、テ

キストに基づきつつ、横光前期文学の思想を解明することを通して、新しい横光利一像の提出を目指したい。

注、

（1）千葉亀雄「新感覚派の誕生」（神谷忠孝等編『現代文芸評論』、双文社出版、一九七三）（初出：『世紀』、一九二四・十一）
（2）平野謙「昭和初年代の文學」（荒正人等著『概説現代日本文学史』、塙書房、一九四九）
（3）伊藤整「解説」（『現代日本小説大系』第四十三巻、河出書房、一九五〇）
（4）平野謙『昭和文学入門』（河出新書、一九五六）
（5）瀬沼茂樹「心理主義の発展とその帰趨」（『思想』、一九三〇・十）
（6）春山行夫『現代世界文学概観』（新潮社、一九四一）
（7）伊藤整「新興芸術派と新心理主義文学」（『近代文学』第五巻第七号、一九五〇・八）
（8）横光利一「どんな風に発展するか」（『文学時代』第二巻第六号、一九三〇・六）
（9）横光利一・片岡鉄兵等「『文芸時代』座談会」（『文芸』第三巻第七号、一九三二・七）
（10）中河与一「新感覚派の運動」（『近代文学』第五巻第七号、一九五〇・八）
（11）那須辰造「新感覚派の文章」（『国文学解釈と鑑賞』第十五巻第四号、一九五〇・四）
（12）小田切秀雄「新感覚派の成立」（『講座日本近代文学史』第四巻、一九五七）
（13）瀬沼茂樹「新感覚派と新興芸術派」（日本近代文学館編『日本近代文学史』、読売新聞社、一九六六）
（14）栗坪良樹「千葉亀雄と横光利一――〝新感覚〟理論の意味と内実」（『日本近代文学』第六号、一九六七・五）
（15）デニス・キーン『モダニスト横光利一』（伊藤悟・井上謙訳、河出書房新社、一九八二）
（16）田口律男「反転する都市」（『講座・昭和文学史』第一巻、有精堂、一九八八・二）

（17）吉本隆明『言語にとって美とはなにか』（勁草書房、一九六六）
（18）栗坪良樹「横光利一と志賀直哉」（由良哲次編『横光利一の文学と生涯』、桜楓社、一九七七）
（19）羽鳥徹哉「前衛芸術,その受容と展開（その一）―新感覚派への道筋―」（『成蹊大学文学部紀要』第二十五号、一九八九・十二）
（20）菅野昭正『横光利一』（福武書店、一九九一）
（21）保昌正夫『横光利一』（明治書院、一九六六）
（22）田口律男「横光利一「機械」論―ある都市流入者の末路」（『近代文学試論』第二十四号、一九八六・十二）
（23）横光利一「心理主義文学と科学」（『文学時代』第三巻第六号、一九三一・六）
（24）横光利一「現実界隈」（『改造』第十四巻第五号、一九三二・五）
（25）松村剛「解説」（『春は馬車に乗って・機械』、角川文庫、一九六二）
（26）日沼倫太郎「虚構への意志」（『文学界』第十七巻第十二号、一九六三・十二）
（27）曾根博義「「機械」と「水晶幻想」」（『定本横光利一全集』月報5、一九八一）
（28）桂秀実『探偵のクリティック』（思潮社、一九八八）

第一章　横光利一「無常の風」論――天地人の文学

第一節　問題提起

「無常の風」は、一九二五年（大正十四年）九月発行の『文藝春秋』第三年第九号に発表され、一九三一年（昭和六年）十一月、白水社刊行の『書方草紙』に収録された、横光利一の初期エッセイである。「無常の風」の冒頭は、次のように始まる(1)。

幼い頃、「無常の風が吹いて来ると人が死ぬ」と母は云つた。それから私は風が吹く度に無常の風ではないかと恐れ出した。私の家からは葬式が長い間出なかつた。それに、近頃になつて無常の風が私の家の中を吹き始めた。先づ、父が吹かれて死んだ。すると、母が死んだ。私は字が読める頃になると「無常」の風とは「無情」の風にちがひないと思ひ出した。所が「無情」は「無常」だと分かると、無常とは梵語で輪廻の意味だと云ふことも知り始めた。（中略）無常の風に吹きつけられると人の血管が破れるのにちがひないと思つた。

無常の風とは、元来、仏教由来(2)の、世の無常を「風」に比喩する概念である。横光は、この風を抽象的概念として理解せず、人の死と関連する物理的存在とした。横光は、身内に起こる凶事をこの風で解釈し、「無常の風に吹きつけられると人の血管が破れる」と思いこみ、さらに次のように論じている。

私は中学時代から地貌と云ふことに興味を持つてゐた。私は旅行をするといつもその土地の岩質に眼をつけた。河原を歩いても砂礫の質の相違によつて河の支流の拡がりを感じるのが面白かつた。しかし今は地貌の隆起に心がひかれる。隆起の相違によつて気流に変化があるのは当然だからである。此の気流と生活と云ふことは余程親密な

相関性を持つてゐる。殊に人間の運命とは特にいちじるしい関係があると私は思ふやうになつて来た。人間の意志は気流の為に屈折する。意志は直線形に進行する性情があるが、途中で方向を変化さすのは気流の力が多大である。この法則は私の独断だとは思はない。アメリカの或る地方では東風が吹くと殺人犯が激増するといふ。フエリオの犯罪学には殺人者が殺人をする際、気流の温度の相違によつて忽ち狂人に変化し、殺人が不可能となつて逃亡する実例を上げてある。

横光は、中学時代以来の、地貌に対する興味を端緒として、地形と意識をかかわらせ、無常の風を解釈しようとしていた。地貌が気流を経由して人間の意識を支配するという観念は、風と血管の関連性と共通する所がある。地貌は、気流を形成することで、身体を通じて、人間の意識を左右するという。横光は、この説を補強するため、「フエリオの犯罪学」における実例を援引している。「無常の風」では、無常の風と横光文学の関係は次のように示される。

私は小説を書く男であるが小説の中で人間の運命を発展さす場合、いつも此の風と光線とが気にかかる。確に此の風と光線とは人間の意志と感情の発生及び発展に重大な必然的影響があると思ふ。

「無常の風」の結末において、横光は、「私は小説を書く男であるが小説の中で人間の運命を発展さす場合、いつも此の風と光線とが気にかかる」と述べ、自らこの「風」を作品内に書き込んだことに言及している。無常の風とは何か。それはどのように横光文学に反映されているのか。この二つの問いを解明することが、本章の目的である。

第二節　フェリーの犯罪学

横光は、「無常の風」において、風と犯罪の因果関係を論証しようとして、「フエリオの犯罪学」に言及した。この思想の理論的根拠は、「フエリオの犯罪学」にあるようである。「フエリオ」とは、イタリアの犯罪学者、エンリコ・フェリー

(Enrico Ferri) のことである(3)。彼は一八五六年に生まれ、一九二九年に没する犯罪学者、政治家、社会主義者である。犯罪学の先駆者チェーザレ・ロンブローゾに師事し、ボローニャ大学助教授、パレルモ大学教授、ローマ大学教授を歴任し、政治家としては、イタリア社会党の党首となる(4)。

フェリーの著作「実証派犯罪学」(5)によれば、犯罪学は、あらゆる自然科学と同様に、実証的に展開されるべきであり、犯罪についても、伝染病の救治と同様に、実験的方法によって自然現象として研究すべきだという。そして、フェリーは、当時主流であった古典派犯罪学に対して、その根本にある善悪の観念を攻撃した。古典派犯罪学は、犯罪の原因は犯人の罪悪にあるとするが、実証派犯罪学は、善悪の存在を否定し、犯罪を自然現象として理解する。フェリーの思想は、この対立にとどまらず、さらに本質的に思考し、対立の背後に存在する自由意志の問題に発展させる。フェリーは、「実証派犯罪学」において、次のように述べている。

古典派犯罪学者及び普通人の一般的意見は大体次の如くである。即ち犯罪は道徳的罪を含んで居る、何故かなれば有徳の道を去り犯罪の道を選んだ所の個人の自由意志によるからである。故に其は相当した量の刑罰を課して圧迫さるべきである、と云ふにある。此れは今日までの犯罪の一般的概念である。而して自由人類意志――因果の永久的大洋中に於ける唯一の奇跡的活動者なる――は人が有徳か悪徳かを自由に選択し得る所の仮定に導くものである。近世心理学が実証的近世的調査の凡ての器械を固めて、自由意思のあると云ふことを否認し、人類の凡ての行為は人格と人の環境との協働の結果なると云ふことを主張して居る今日、諸君は自由意志の存在を尚ほ如何にして信じ得るか？（中略）

凡ゆる物理現象は前以て決定された所の原因の必然的結果である。若し此等の原因が吾々に知られて居るならば、吾々は諸現象は必然的であり、宿命的であると確信する。又若し吾々が原因を知らないならば、吾々は其を突変的だと考へる。同じことが人間的現象に於ても真理である。然し吾々は多くの場合に於て、内的並に外的諸原因を知らないからして、吾々は其を自由現象であると主張する。即ち其はその原因によつて必要的に決定されたのではないと

主張するのである。

古典派犯罪学は、人間が自由に行動できると信じ、犯罪者を処罰すべきものと思惟する。実証派犯罪学であるフェリーは、それに反して、犯罪者が「自ら欲して犯罪」することを認めず、犯罪を犯罪者の「内部的及び外部的原因結果の連鎖」の産物と考え、犯罪者本人が選択できるものではないと主張する。

フェリーは、すべての物理現象を「前以て決定された所の原因の必然的結果」と考える。もし人間がすべての原因を理解できれば、諸現象は「必然的であり、宿命的である」ということを了解するだろう。しかし、人間は多くの場合、事象の因果関係を理解できない。従って、それを自由現象と主張するしかない。

そして、フェリーは、犯罪の「自然的原因」を「人類学的」、「地球的」、及び「社会的」という三要素に分類し、犯罪をこれらの要因の「相互作用の結果」であると唱えた。

犯罪の「社会的要因」については、説明の必要はないだろう。犯罪の「人類学的要因」について、フェリーは、「器官的及び解剖学的体質」に関するものと考え、「吾々は誰でも或る器官的及び心理学的結合を出生に於て遺伝し、一生涯の間に人格化する。此が人間活動の個人的要因を作る」とし、人間の身体と器官の状態がその行動を支配することを主張する。横光が「無常の風」で言及する「フェリオの犯罪学」は、「実証派犯罪学」における「地球的要因」の部分である。

吾々は一般に自分が住んで居る所の物理的環境の諸状態を忘却して居る。（中略）地球的環境は我々の生活的活動の上に、神経系統によつて、大なる影響を持つて居る。吾々は、南風或は北風の吹くのに従つて、異つた気風になる。ガリバルヂはパムパスの草原にあつた時、彼は、パムパス風が吹くときには、彼の友人等が腹立つて、激烈な口論をする癖があつたこと、及び此の風が止むと友人等の動作も変つたことを目撃した。犯罪統計学の大創設者なる、ケトレー（Quetelet）及びゲリー（Guerry）は、気候の変化は犯罪の変化と一緒に行はれて居ることを観察した。性慾的犯罪は春や夏に於けるよりも、冬に於ては少ない。且つ此の点に関して、私が嘗つても主張し、今尚ほ主張して居ることは、若し財産に対する犯罪が冬に於て増加するものならば、其は温度と社会状態との結合的結果に負ふもので

あると云ふことである。

フェリーは、人間が無意識のうちに、絶えず「神経系統」を通じて、周囲の環境に影響されることを力説し、「ガリバルヂ」のエピソードを挙げる。「パムパス」は、南米・アルゼンチンに位置する草原で、「パムパス風」が吹くと人は口論するという。横光は前引「無常の風」において、「アメリカの或る地方では東風が吹くと殺人犯が激増するといふ」と述べていた。「風」と犯罪の因果関係をめぐって、横光が「実証派犯罪学」の「地球的要因」の部分を参照したのは間違いないだろう。

ただし、「無常の風」の記述は、邦訳「フエリ氏実証派犯罪学」の記述と完全には一致しない。「実証派犯罪学」は、一九〇一年四月、フェリーがナポリ大学において行った三回の講義に基づく。一九一三年、Ernest Untermannによって英訳され、一九二四年、教育社会学者浅野研真によって英訳を重訳した邦文が『日本法政新誌』に連載された。「フエリ氏実証派犯罪学」における南米の「パムパスの草原」は、「無常の風」においては、「アメリカの或る地方」と曖昧化される。風と犯罪の因果関係をめぐっても、「フエリ氏実証派犯罪学」は「南風或は北風」とするが、「無常の風」では「東風」とする。横光は邦訳以外のテキストで読んでいたと推測される。

一九一六年四月、横光は、早稲田大学高等予科英文科に入学した。翌年一月、長期欠席により除籍となるが、一九一八年三月、除籍取消願いを提出し、四月、元級第一学年に編入した。一九二一年四月、早稲田大学専門部政治経済学科へ転入したが、十二月、長期欠席と学費未納のため再び除籍となっている(6)。横光が欠席や除籍を繰り返しながらも、五年間にわたって、早稲田大学に在学したことに注目したい。早稲田大学図書館は、Ernest Untermann訳の「実証派犯罪学」の英訳*The Positive School of Criminology*を所蔵している。本の見返しには、「MARUZEN CO. LTO. BOOK DEPARTMENT TOKYO」というシールが貼られ、扉には、「大正七年十月二十一日求購」の印が押されている。早稲田大学図書館は、一九一八年（大正七年）、丸善を経由して、「実証派犯罪学」の英訳本を購入していたのである。横光が、早稲田大学在学中に「実証派犯罪学」の英訳本に接した可能性は高いだろう。

さて、「無常の風」は、日本の家相学もフェリーの犯罪学で解釈する。

私の家でも窓の相違で部屋の空気の中に一定の通路が生じ、通路を外れた箇所で碁を打つと後が長く続かずに直ぐ頭が疲れて来る。だが通路の中で碁を打つと客観性が無くなつて喧嘩碁ばかり打ち始める。その代りに頭がいつまでも続いて行く。家相学では家の東南に桃の木があると淫風が吹くと書いてあるが、淫風は風の吹く所には起らない風である。風の吹きまくる所で性慾は起りはしない。

横光は、家の構造を地形と照応させ、部屋に生じた空気の通路を、地形に屈折する気流と対置し、「空気」の通路によって、人の行動も変化すると主張する。「通路の中で碁を打つと客観性が無くなつて喧嘩碁ばかり打ち始める」の件は、前引「実証派犯罪学」「ガリバルヂはパムパスの草原にあつた時、彼は、パムパス風が吹くときには、彼の友人等が腹立つて、激烈な口論をする癖があつた」という一文とよく符合していよう。家相学と淫風の関係も、前引「実証派犯罪学」の「性慾的犯罪は春や夏に於けるよりも、冬に於ては少ない」という一文と主張が一致する。

「無常の風」発表の二ヶ月後、横光は「感想と風景」（『文芸時代』第二巻第十一号、一九二五年十一月）を発表した。「感想と風景」は、「無常の風」と同じく『書方草紙』に収録されたエッセイである。身辺事実に基づくこのエッセイにおいて、横光は、家相学の発想をさらに発展させている。

契約した瞬間、ふと、「さて此の家は？」と考へた。左様に考へたと云ふ気持の中には、家全体から受ける感じに、一点「いやだ、」と思ふ感じがあつた。どこか明るい中に不思議な暗さが何ぜともなく心に残つたからである。

さて、いよいよ此の家に変つて来た。すると、北に連つた壁が絶えず私の心を圧迫した。すると、私は病気になつた。二ヶ月の間床にゐて、起き上がらうとすると、俄然として母が死んだ。と、次ぎには忽ち家人が病気になり出した。（中略）

昨日私の友人の小児が死んだ。彼が新しく変つてからまだ二週間にもならないその家へ行つてみると、いきなり茶の間の壁から圧迫を感じた。私の家の壁と同じ圧迫感である。友人は門が北向きだからいけないのだと云ふ。が、

私は此の壁だと云つた。変に心の眼前に絶えず突き立つてゐるやうな壁は呼吸器病を連れて来る。

新しい家を借りるときは、いつも壁を見るものだと私は思つてゐる。もし幾分の不満を忍耐して了つてゐると、いつの間にか、その一点の心の暗さが生活の中で尨大な翼を拡げて黙々と運命の上にのさばつてゐるものである。

横光は家を契約したとき、違和感を覚えたが、そのまま放置した。この些細な違和感が、後に横光一家に不幸をもたらす。「感想と風景」においては、家族の病気も、友人の凶事も、すべての不幸の原因は、家の構造にあるとされる。問題となる壁が、空気の流通に干渉し、住人は呼吸器病を発症する。この肺病にかんする発想は、単なる横光の実体験ではなく、風と犯罪の関係と同じく、フェリーの影響を受けたものである。ここでは、フェリー『実証科学と社会主義』の一節を、丸山嘉八郎訳(7)により引用する。

如何なる病気も悉く、其急性慢性伝染性非伝染性重症軽症を問はず、個人の人類学的構造及び身的社会環境の影響の所産ならざるはない。之を決定する個人的事情及び社会的環境の程度は、病気の差違に従つて変るのである。即ち例へば結核病又は熱病は、社会的環境に対する注意も必要ではあるが、主として個人の有機的構造に因るのであり、。ペレーグラ（伊太利の一種の癩病）虎疫窒扶斯等は、却りて主として社会的環境に因るのである。

フェリーは、病気についても、個人の人類学的構造と身的社会環境の影響の所産と見なす。そして、「結核病」にも環境の影響を無視できないという。横光は、フェリーの思想に触れ、フェリーの「結核病」に対する認識を家族の病気に投影して自身の境遇を理解したのではないか。横光は、この思想を日本従来の「家相学」と融合させることによって、独自の認識を構築し始めたのである。

第三節　フェリーの社会学

「無常の風」の前半で、横光は、地形と意識の関連性を指摘し、個人が環境によって支配されることを論じた。この法則は、個人の集合体である社会においても、当然通用するはずである。「無常の風」の後半では、この思考はさらに進み、天文・地文と社会の関係が論じられていく。

それはともかくとして無常の風は日本の地貌ではどのあたりから吹いて来る風かと考へると、もうここからは独断にならざるを得なくなる。とにかく乾燥した風だ。乾燥した風は窒素の加減で霊魂が放散し易いものらしい。塩分を含んだ風の中では人はさう容易く死ぬものではないと見える。それに乾燥した風は太陽のコロナと多大の関係を持つてゐる。コロナがまた太陽の黒点と著しい関係を持つてゐる。

横光は、ここで、「無常の風」を「乾燥した風」と表現する。「乾燥した風」では、霊魂が放散しやすく、塩分の多い風では人は死ににくくなるという。空気の成分も人の運命にかかわるだけではない。横光は、「乾燥した風」を天上の太陽と関連付け、「太陽のコロナ」「太陽の黒点」に言及し、それらが人の生死にもかかわるとした。遥かなる宇宙の自然現象が、如何にして地上の人命につながるのか。この現象を理解するため、フェリー『実証科学と社会主義』の一節を丸山訳により引用する。

社会的現象は皆歴史的事情及び環境の所産である。近世々界に於ける地球の凡て部分の交通が容易となり及び非常に頻繁になりしことは、地上生活の最も遠隔なる、最も間接なる事情に就て、経済的、政治的、法律的、道徳的、芸術的又は科学的有ゆる行為の互助を倍々密接ならしめた。

家督相続及個人的蓄財に対し何等制限を有せざる現今私有財産組織に於て、例へば電信、蒸気の如き物質の変化に関し、人々の労働に対する科学的発見の不断の且つ常に益々完全なる適用、日々拡大する移民等は、農夫、労働者、小商人等の家族の存在をして、目に見えざる然れどもしつかりした糸を以て、世界的生存に合一せしめ、最も遠隔の国の珈琲や綿花や小麦の収穫は、文明国の凡ての部分に影響に及ぼすこと、恰も太陽黒点の増減が、定期的に農業上の危期の共通なる効果を形成し且つ幾億の人に直接影響するが如くである。

フェリーによれば、すべての社会現象は、森羅万象と相互に関係しあって成立しているものであって、独立自存のものではない。太陽黒点の周期的現象は、人間社会に、農業の定期的恐慌として反映する。社会の変動は、自然の周期と一致するという理解である。横光が言う「私は小説を書く男であるが小説の中で人間の運命を発展さす場合、いつも此の風と光線とが気にかかる」の「光線」は、この社会変動にかかわる太陽黒点のことであった。太陽黒点に触れて、横光の問題意識はもう一度地上に戻る。

私は社会主義の布衍される地域がまた此の風の密度によつて非常に相違して行くものといつも思ふ。此の主義は風のやうに地貌とまた密接な関係を持つてゐる。地貌の運動作用、特に準平原の輪廻作用を思ふと私は社会主義者にならざるを得なくなる。ボルシエビイキの現状を見てゐても伊太利及び日本、英国、独逸の社会現象を見てゐてもその作用は地質学の造山運動と殆ど異る所がない。

横光は、社会主義と地質運動を結び付ける。その背景には、やはりフェリーの存在があっただろう。フェリーは犯罪学者でありながら、同時に政治家、社会主義者であった。社会主義者フェリーの思想はマルクスの思想と根本的に対立する。フェリーは、『実証科学と社会主義』において、マルクスの根本思想を「経済現象は凡ての他の人類又は社会的顕現の基礎であり且つ条件である」と要約した。所謂「唯物史観」である。フェリーは、「唯物史観」に対して、次のように反駁している。

有ゆる結果は常に錯雑紛糾せる多くの原因の結果にして、単純なる原因より来るものでなく、且つ有ゆる結果は順々に他の現象の原因となるものなることを確かめる。故に之を敷衍して新の観念の強硬な形態となすことが必要である。

個人の心理的顕現が悉く、有機的事情（気風）及其の住む環境の結果なると同様、道徳法律的政治等民衆の社会的顕現は、皆其の有機的事情（民族）及び生活の自然的基礎たる一定の経済組織を決定する限り其の環境の結果である。

「唯物史観」は、あらゆる社会現象を経済基礎に従うものと見なす理論である。しかし、フェリーはこれに反して、物事の結果には複数の原因が並存することを主張し、経済制度も周囲の自然環境の産物と見なすべきであるという。フェリーは、『実証科学と社会主義』において、この思想の背後に存在する原理について、次のように説明している。

歴史学派が法律学及政治学（当時既に幾多の点で異端説なる）の研究をなすに際し採れる相対論的傾向を、社会学に適用するにつきスペンサーが打建てた進化論は、事物の変化を示して曰く、天文学、地質学、生物学社会学等の序程に於て現在は、自然的必然的不断の無数な変遷の結果にならずして、従つて現在は過去と異なり且つ将来も確かに現在より異なるべしと。スペンサー説はライプニツツ及びヘーゲルの抽象論に対し、人類智識の凡ての方面に於て頗る多くの科学的証拠を提供せしに外ならない。即「現在は過去の子にして未来の母であり、何物も生成せず、万物は生成す」。ライエル以後地質学は既に地質大変動説の伝説的概念に代ゆるに、地球の漸次的日日の変遷に関する、科学的概念を以てして此れを立証しておる。

フェリーの社会学の前提にあるのは、彼の犯罪学と同じく、自由意志の否定である。フェリーはスペンサーの学説を自説の補足とした。スペンサーは、社会を包括するあらゆる事象は、流転の中にあるという。フェリーはこうした抽象的解釈に満足せず、さらに当時の主流である地質学者ライエルの「斉一説」の成果を引用し、地形の推移を以て、実証的に自然の変遷を説明している。

さて、横光は、社会主義と地質作用の関係を論証するにあたって、「準平原の輪廻作用」という表現を使った。「準平原の輪廻作用」とは、地質学「地形輪廻説」の術語である。横光文学における「地形輪廻説」の利用については、拙稿「「静かなる羅列」論――「唯物史観」の相対化としての「地形輪廻説」」(8) において論じた。「地形輪廻説」とは、一八九九年にアメリカの地理学者 William Morris Davis が創唱した学説である。「地形輪廻説」によれば、地形は、地殻変動などの「内的営力」によって作られる。地表に突出される地形は、河流・氷河・波浪・風力・風化などの太陽エネルギーの変形である「外的営力」の削剥で、平坦化される。所謂「太陽の均平作用」である。地形が削剥され、再び隆起して再度

平坦化されるような系統的変遷を、「地理学的輪廻」という。

「実証派犯罪学」には、「人類は天地創造の中心ではなくて、唯だ動物学的鎖の最後の環である、また自然は永遠的エネルギーを、賦与されて居て其に依つて動植物の生命を、鉱物の生命（結晶体に於てへ生命の法則は働ひて居る）と同様に、目に見えない様な微生物から、最高形態なる人類にまで化成したものである」という一節がある。横光は、このエネルギーの環に注目し、ライエルの「斉一説」より新たなデイビスの「地形輪廻説」を援用することで、地表に働く社会と人の運命を天地間のエネルギー循環という必然的現象の一環として統合させ、東洋の輪廻を解釈したのである。

横光の思想は、フェリーの社会学から、さらに発展したらしい。講演用草稿と見られる未発表原稿には、次の一節がある(9)。

地型学の原論では地上に働く総ての営力は、総て太陽の均平作用に基くと云ふことが根底になつてゐるやうですが、実際われわれが想像してさへが、山が風雪のために削られてだんだんと低くなつて平原化して高低がなくなり、海が陸になつて海面から浮き上る陸造運動が行はれたりしながら、次第に、地球の表面が完全な球体を描いて行く。かう云ふ運動も総て、太陽を中心にして完全へ完全へと向つてゐる何かの意志であるかのやうに思はれてなりません。

さう云ふ意味からしても、東洋も西洋も、だんだん、一致して完全へ完全へと向つて進んでゐるにちがひないと感じられます。しかしながら、完全へ向つて進むには、山が風や雨や雪や雲のために削られて平面へ崩れなければならないやうに、東洋と西洋とのどちらか高き方は崩れなければなりません。

例へば氏族の間に、これまでしばしば戦争と云ふものがあつて、血を流して来てをりますが、これなども、確に、太陽の均平作用によるものに相違ないと思はれます。一つの戦争があるごとに、その国の男子が殺戮をし合い、婦女子は奪はれ、勝つたものの氏族の血液は負けたものの氏族の中へ殺到して行く、と云ふやうな現象を見てゐても、確に戦争と云ふものは、太陽の均平作用に属してゐる一つの、完全への到達としての努力であるかのやうに思はれ

ます。

横光家が所蔵していた講演草稿の執筆年月は不明であるが、ここで言及する「地形輪廻説」の思想と術語は、辻村太郎『地形学』（一九二三年）[10]によって日本に紹介されたものであった。草稿本文には、次のような執筆時期を示唆する一文が確認される。

目下の支那を一寸頭に浮べても、わたくし達は、支那を侵略してゐる西洋諸国が賢いのか侵略されてゐる、支那そのものが馬鹿なのか、或ひは、西洋の列国が馬鹿を見てゐるのか、支那そのものが列国を馬鹿にしてゐるのか、一寸判断に苦しむ状態を示してゐます。

執筆当時の中国は、日本人横光から見れば、西洋諸国に侵略されている状態にあった。この草稿は、『地形学』刊行後（一九二三年）、満州事変勃発以前（一九三一年）のものと推定される。

横光によれば、文明の終焉は、東洋と西洋を問わず、太陽の均平作用の一環として、必ず均平に収束されるものである。フェリーの思想は、あくまでも社会主義を弁護するための言説、社会論であったが、横光は、フェリーの思想を踏襲せず、文明の本質を思考し、文明論に及んだ。「無常の風」は次の一文で閉じられる。

此の風と光線とエヂプト、アツシリア、ペルー、印度、支那の文化の発達とを関連させて考へて見た場合、誰とてひそかな私のこのあられもない独断の楽しみを嗤ひはすまい。

横光は、世界各地のあらゆる文明も、すべて自然の力で作られたものと考える。個人の行動と運命は、周囲の環境によって支配されている。個人の集合体である社会は、環境の支配から逃れられない。自然は、地形輪廻、太陽黒点などの周期的現象として現れる。文明は、自然の循環の一環として現れる。「無常の風」は、このような問題意識に基づいて書かれたエッセイである。

第四節　犯罪学の横光文学

では、「小説を書く男」である横光は、「無常の風」に示した思想を、小説の中にどのように反映させていったのだろうか。

フェリーの犯罪学を援用した横光の小説として、「碑文」（『新思潮』（「第六次の二」）第一号、一九二三年七月）がある。拙稿「横光利一「碑文」論――『聖書』を相対化する語り」（11）において論じたように、「碑文」は、聖書の世界をふまえた作品である。ヘルモン山上にあるガルタンの市民は、降り止まない雨の影響で、心身ともに劣化して行く。しかし、ガルタンの市民は、そうした異変が雨の影響であることを誰も意識せず、相互の罪悪の結果と確信し、全滅を迎える。

「碑文」において、雨の原因について論争が行われたとき、ある哲学者は「ガルタンがヘルモン山上に位置する」ことを挙げ、山勢による上昇気流がもたらした地形性降雨であることを指摘した。レバノンに実在するヘルモン山は、確かにその高さを以て、最も乾燥する地域に多量な降水をもたらし、ヨルダン川となって一帯を潤している。しかし、「碑文」の中でこの地理的観点が深められることはない。

ガルタンの市民は、雨の影響で、発狂、疾病、自殺、犯罪という順序を踏み、滅んでいく。『社会政策と近世科学』には、「疾病、犯罪、発狂、自殺等は、飢饉、恐慌の場合に於て著しく増加するも経済界の割合に順調なる年には大いに減少す」という一節が確認される。「碑文」には、フェリーの社会学も吸収されていると思われる。

「碑文」は、ガルタン滅落の過程で、「ガルタンの殺戮は次第にその勢ひを弱めていつた。が、それにひきかへ、市民の肉体は日に日に激しい性の衝動を高め始めると、終にガルタンの城市はヘルモンの山上で、声を潜めた一大売淫所と変つて来た」という災難中の性衝動を描く。災害による性衝動の亢進も、フェリーに由来するものである。ここでは、フ

エリー「大震後の風俗壊乱と女子の心理」（12）を全文引用する。

先年イタリア国メシナ大震の際、生存せる人々は、激烈なる打撃を蒙りし結果として、無感情の状態に陥り、四囲沈静に帰したる後は、呼声を発し又は嘆声を漏すことすら敢てする能はず、一面に於ては、野獣的主義の本能は旧に倍し、多数は概ね女子と合意の上姦淫を恣にせり、然れば、死者三万に及びしに当り、更に多数の生児を生ずべき奇観を呈せり、感情の激動を経且大危険を免れたる女子は服従し易きものなることは確実なり、即ち感情激動後に於ては、禁止観念多少一時的に消滅し、殊に意志に至りては甚しく障碍せられ、通常深く潜在せる情欲の発露を来すに至る、前述メシナ大震後の際に於ても、女子の道徳力及体力共に羸弱となりし結果、容易に男子の言に従ひたるものにして、或者にありては、多数男子と同じく、性欲非常に興奮せられたるものある可し、斯の如きは要するに主として往々極めて弛緩なり易き禁止観念の消失に基くものにして、革命、攻戦の際等にも観る所の現象なり、斯る際にありては、一面戦闘欲は、流血等の為め、男子の性欲旺盛なるに反し、恐怖等の為め女子の意思力薄弱となる、彼の情死前に於ける交接中の一部のものは此種類に属す又或事件に関し激怒せる少女は、極めて誘惑し易く、為に誘惑者は此性質を利用し之が誘惑を企つるものあり。

フェリーは、イタリアのメシナ大震後の人間を観察し、震後に亢進する性欲に注目した。性欲の興奮も、禁止観念の消失も、地震の影響で「通常深く潜在せる情欲」が発露し、「野獣的主義の本能」があらわにされてしまった結果という理解である。「碑文」に描かれるところの性衝動も、おそらく、フェリーの学説を反映させたものであったのだろう。

「碑文」という実証派犯罪学を投影した世界の中で、市民たちは因循な古典派犯罪学に属していると言える。横光は「ノアの方舟」を下敷として使用し、あえて原作と異なる全滅という結末を選んだ。それは、勧善懲悪の観念を標榜するキリスト教に対する批判であろう。

第五節　家相学の横光文学

家相学を用いて書かれた小説として、「美しい家」（『東京日日新聞』、一九二七年一月）がある。「感想と風景」が発表された七ヶ月後、横光の妻も死ぬ。横光は、家相学の思想と自身の経験を交えつつ小説化し、翌年一月に「美しい家」を発表した。

ある日、私は妻と二人で郊外へ家を見付けに出て行つた。同じ見付けるからには、まだ一度も行つたことのない方面が良いといふ相談になつた。

私達はその日一日歩き廻つた。夕方には、自分達の歩いてゐる所は一体どこなのだらうと思ふほどもう三半器官が疲れてゐた。（中略）

（こゝで、私と妻とが同じやうに疲れたといふことが、私達一家の間に、大きな悲劇をもたらした原因であつた。）

（中略）

疲れてはいけない。疲れると判断力がなくなるものだ。私達は疲れた心でまた家を探しに出かけていつた。（中略）

その家へ越して来たのは、それから一週間もしてからだつた。私はその家が自分の家になつてから、初めて良く家の中を見廻した。すると、私は急に、「いやだ。」と思つた。どうしてこの明るい家の中に、こんな暗さがあるのだらうと考へた。北側に一連の壁があるこれだ。――しかし、私は間もなく周囲の庭に咲き乱れてゐるとりどりの花の色に迷ひ出した。外の色が、内の暗さを征服した。私は北に連らなる頑固な壁を知らずしらずの間に頭の中から忘れ出した。

だが、秋が深くなると、薔薇が散つた。菊が枯れた。さうして、枯葉の積つた間から、漸く淋しげな山茶花がのぞき出すと、北に連らなつた一連の暗い壁が、俄然として勢力をもたげ出した。私はかぜを引き続けた。母が、「アツ」

といつたたまゝ死んでしまつた。すると、妻が母に代つて床についた。私の誇つてゐた門から登る花の小路は、氷を買ひに走る道となつた。

「美しい家」の筋は「感想と風景」と一致し、かつ、その思想は「無常の風」以来の「家相学」の延長線上にある。小説の冒頭において、この家を選択する理由が示される。家探しする新婚夫婦は、一日中歩き廻ったことによって、「三半器官」が疲れ、「判断力」もおち、構造に問題がある家を選択してしまう。「三半器官」の疲労は、フェリーの言う「人類学的因素」と対応する。「美しい家」では、「三半器官」のような具体的な器官が気流と神経に代わり、外部と内面の媒体となる。

「恐ろしき花」という戯曲も家相学的作品である。一九二五年七月から一九二六年六月にかけて『新小説』『文藝春秋』に連載された「恐ろしき花」は、淫蕩な一族を題材とする物語である。一幕「恐ろしき花」（『新小説』第三十巻第七号、一九二五年七月）の冒頭において、主人公Aは、友人Bに対して、「家相」という言葉を使いつつ、自宅の「鬼門」について話し、「さう云ふ所から、そこの家には罪悪が生れて行く」と述べている。自分の妹への求愛に対して、Aは自宅の「物置小屋」を持ち出し、Bの求愛を拒絶する。

A。君、あそこに物置があるだらう。（物置小屋を指差す。）例へば僕の家の屋敷の中の、ああ云ふ所に一つの物置小屋があるとするね、あそこは一番人眼にかからない所だ。僕の家の者達はあの小屋に関する言葉を誰も云はない。殆どあの小屋の存在さへ知らないと云つた形だ。所が、僕の家の者達で人心のついてゐる者は、誰でもあの小屋を一番重大に考へてゐるにちがひないんだ。誰も一口もあの小屋について云はないだけ、それだけ、家人にとつては重大なんだからね。皆夫々自分だけにとつては大切な所だと感じてゐるんだ。だから、自分以外の者は皆あの小屋を忘れてゐると思つてゐる。所が、誰も彼もがさう密かに思つてゐるんだから、奇怪千万な小屋なんだ。僕の家の生活が殆ど代代あの小屋を中心にして動いて来たやうなものなんだ。僕の家にとつては、あの小屋は所謂例外と云ふ奴だ。僕の家そのものも例外的なものだが、あの小屋はそのまた例外と云ふ奴だ。

B。君はまた僕を脅かさうとしてゐる。

A。いや、僕は僕の家の伝統を話しておかうと思つてゐるだけさ。僕の家の代代の淫蕩さは遺伝的だ。僕だつて、妹だつて、あの小屋の中で生れた破目になつたにちがひないんだ。実際、君、遺伝の中で淫蕩な遺伝ほど猖獗を極める奴はないからね。

妹への求愛に対して、Aは自宅の「物置小屋」の存在を紹介し、「僕の家の生活が殆ど代代あの小屋を中心にして動いて来た」として、一族の淫蕩な性質もこの小屋に由来するものと解釈している。所謂「家相」の認知である。「美しい家」「恐ろしき花」は、家相学にフェリーの犯罪学を加味して成り立つているのである。

第六節　地形学の横光文学

フェリーの社会学を利用した作品として、「静かなる羅列」(『文藝春秋』第三年第七号、一九二五年七月)と「街へ出るトンネル」(『中央公論』第四十一巻第七号、一九二六年七月)が挙げられる。拙稿「「静かなる羅列」論――「唯物史観」の相対化としての「地形輪廻説」」で論じたように、「静かなる羅列」において、SQ川流域に発祥する文明は、相克する二川に支配される。社会の盛衰興亡は、川の勢力の消長と軌を一にする。小説の終盤における戦争による文明の壊滅は、「地理学的輪廻」の必然的運命である。この解読は、前引横光未発表原稿の内容とも一致する。

「街へ出るトンネル」の主人公は、トンネル工事を請け負う資産家の息子計介である。小説冒頭で、トロッコ墜落事故の起きたことが示唆されるが、工事現場の犠牲について、「簡単に社会学の抽斗を開けて見る気はしな」い計介は、犠牲になった坑夫を「計介一家の利益を上げる過程への犠牲」とは認めない。「峡谷の河口で発展する港が悪い」と思い込み、自分の一家も「港の発展に与へられてゐる一つの犠牲」と信じている。計介は、工事現場の紛争を、トンネルの「成長す

る養分」ととらえ、街まで延びるトンネルを、街の需要が作った怪物と想像する。

――しかし、それがどうしたんだ。

計介はいつのまにか雨に濡れて桶のやうにびしよびしよになつてゐた。彼は学生時代に習つた地形学の原論をふと思ひ出して呟いた。

――地表に働く営力の最後の目的は、総て、太陽の均平作用である。

計介は、工事現場の事故と紛争を、人間社会という大きな活動の一部と理解している。労使対立を作品のモチーフとしつつ、階級闘争に帰着させず、社会の背後にある自然を意識させ、「地形輪廻説」の知識を持ち出して、社会活動を「太陽の均平作用」による自然周期の一環として統合する。ここに示されているのは、人間社会の紛争を、自然の不可抗的現象とみなす思想である。

「碑文」では、地形性降雨が人間社会を滅ぼす様が描かれる。「静かなる羅列」においては、川を主人公として、自然輪廻の一環としての人間社会が表現される。「街へ出るトンネル」で、横光は、さらにこの発想を発展させ、個人の生活の視点から出発して、自然周期を描くことに挑戦する。個人生活と自然秩序の交錯は、「街へ出るトンネル」以降の横光文学の底流として流れていくのである。

第七節　結論

「無常の風」とは、自由意志を持たない人間には、自然の周期性を避けることができないという現象の比喩である。フェリーは、人と社会を独立的存在とせず、その上位概念として自然の存在を意識した。それだけではなく、フェリーは、自然を崇拝の対象として認めず、その背後に存在する構造を見きわめ、自然という概念を超克しようとした。自然の存

在は、地形という物理的現象を通じて具体化されるものである。

環境に支配される意志、自然に支配される社会、この二つの思想の土台になるのは、自由意志の否定である。横光は、フェリーの犯罪学を吸収した上で、家相学を解釈した。さらにフェリーの社会学と最新の地質学「地形輪廻説」を融合することで、人の存在を天地一体として統合させ、輪廻を解釈した。横光は、東洋の思想と西洋の理論を融合させ、独自の文学世界を構成したのである。

「無常の風」前後、横光は、フェリーの思想を利用し、複数の作品を著している。フェリーの思想を作品に投影するだけではなく、フェリーの著作内容をそのまま小説の種本として使う傾向も認められる。「碑文」「美しい家」「恐ろしき花」は、フェリーの犯罪学の影響下で形成された作品である。「美しい家」のモチーフとなった横光の実体験は、病妻小説群に発展する。フェリーの社会学の影響下で書かれた「静かなる羅列」「街へ出るトンネル」は、横光の文明論につながっていく。

このように形成された横光の思想は、病妻小説群、心理小説群、純粋小説論を経て、日本文明の本質を求める思索にもつながっていく。本章は、横光文学の前提として、「無常の風」を読み解く試みである。

注、

（1）「無常の風」の初出本文と単行本本文の間には、異同が複数確認されるが、意味がほぼ一致するため、ここでは問題視しない。『書方草紙』所収本文の末尾には「無常の風」擱筆時期と思われる「大正十三年六月」（一九二四年六月）の年記があるが、一九二五年一月横光の母死去という事実も合わせて考慮すると、本文には矛盾が出る。また、『文藝春秋』掲載本文は適宜改行されているが、『書方草紙』には改行がない。改行しないことは横光文学の一特徴として知られている。これらの点については、稿を改めて論じたい。

（2）『日本国語大辞典』第二版は、「無常の風」について、「風が花を散らすところから、人の命を奪うこの世の無常を

風にたとえていったもの。無常風」とし、大智度論「咄世間無常　如二水月芭蕉一　功徳満二三界一　無常風所レ壊」を出典とする。『保元物語』「無常のあらしをいかでかのがれさせ給ふべき」という用例のように、日本文学の中でも、この世の無常の比喩として広く用いられている。

（3）「無常の風」発表当時、Enrico Ferriの邦訳表記は、「フェリー」、「フェリオ」、「フェリ」、「フェルリ」など、複数存在しているが、横光が使う「フエリオ」という表記は、横光独自の表現である。

（4）フェリーの事績については、エンリコ・フェリー『実証派犯罪学』（浅野研真訳、文精社、一九二六）、大谷實『刑事政策講義』（弘文堂、一九八七）、『20世紀西洋人名事典』（日外アソシエーツ、一九九五）、瀬川晃『犯罪学』（成文堂、一九九八）を参照。

（5）以下、「実証派犯罪学」の引用は、浅野研真訳「フエリ氏実証派犯罪学」（『日本法政新誌』、一九二四・五～十二）による。ただし、後述するように、横光は同論を邦訳以外のテキストで読んでいたと思われる。

（6）横光の学歴については、井上謙・神谷忠孝・羽鳥徹哉編『横光利一事典』（おうふう、二〇〇二）の年譜を参照。

（7）エンリコ・フエルリ『実証科学と社会主義』（丸山嘉八郎訳、日本図書出版株式会社、一九二一）による。『実証科学と社会主義』は、フェリーが一八九四年に発表した*Socialismo e scienza positiva (Darwin, Spencer, Marx)*の邦訳である。丸山嘉八郎訳は、*Socialism and Positive Science by Enrico Ferri, translated by Edith C. Harvey; the Socialist Library I. Edited by J. Ramsay Macdonald*という英訳を重訳したものである。*Socialismo e scienza positiva (Darwin, Spencer, Marx)*の邦訳には、丸山訳の他に、樋口秀雄訳『社会政策と近世科学』（樋口秀雄編、金港堂、一九〇九）前篇「社会主義と近世科学」、蔭田三郎訳『近世科学と社会主義』（大鐙閣、一九二三）がある。横光がどの邦訳に依拠したか、明言することは難しいが、ひとつの指標として、第三節で言及する「太陽の黒点」に着目してみよう。三邦訳では、それぞれ次表のように訳している。

樋口訳	丸山訳	蔭田訳
恰もかの太陽面に於ける黒点の増減が、直ちに地球上の農業上定期的の恐慌を引起し、以て幾多生霊の運命に直接の影響を與ふるが如し。	恰も太陽黒点の増減が、定期的に農業上の危期の共通なる効果を形成し且つ幾億の人に直接影響するが如くである。	恰も太陽の斑点が増加すると、同時に農業の危機を来し、巨万の人民に直接なる影響を与へると同様である。

樋口・丸山が「黒点」と訳したのに対し、蔭田は「斑点」とする。この点からすれば、横光は樋口訳か丸山訳に依った可能性があると言えよう。それ以上は確定できないが、丸山訳の発行は、「無常の風」の発表に近いという視点から、ここでは丸山訳を引用する。

(8) 英荘園「「静かなる羅列」論――「唯物史観」の相対化としての「地形輪廻説」」(『横光利一研究』第十九号、二〇二一・三)

(9) 『定本横光利一全集　第十六巻』(河出書房新社、一九八七)

(10) 辻村太郎『地形学』(古今書院、一九二三)

(11) 英荘園「横光利一「碑文」論――『聖書』を相対化する語り」(『山口国文』第四十四号、二〇二一・三)

(12) フェリー「大震後の風俗壊乱と女子の心理」(『新公論』第二十六巻第七号、一九一一・七

第二章　「マルクスの審判」の典拠と改稿

第一節　問題提起

「マルクスの審判」は、一九二三年（大正十二年）八月発行の『新潮』第三十九巻第二号に発表され、一九二四年（大正十三年）五月、金星堂刊行の『御身』に収録された、横光利一の初期小説である。「マルクスの審判」には、前稿にあたる執筆年次不詳の「殺人者」(1)という未発表原稿が存在する。

片岡良一(2)、岩上順一(3)、伊藤整(4)は、それぞれ「マルクスの審判」を「静かなる羅列」と同一系列の作品とし、環境に操られる人間をこの系列の主題として理解している。そして、二作品から、経済条件を社会現象の根本とするマルクス主義への批判も読み取っている。ただし、そうした横光の思想の背景について、詳しい考察を展開した論者はいない。

一方、栗坪良樹は、片岡のマルクス主義批判説を否定し、「マルクスの審判」におけるマルクス主義を、「人間心理」を描くための「媒介物」と理解している(5)。心理描写をめぐる指摘として、十重田裕一も、「殺人者」から「マルクスの審判」への改稿に注目しつつ、「マルクスの審判」において判事の心理描写が加筆されたことに言及する(6)。

栗坪は、さらに自説を発展させ、「マルクスの審判」を志賀直哉「范の犯罪」の模倣作とした(7)。「マルクスの審判」を「范の犯罪」の模倣と考える研究者には、他に、宮越勉(8)、柳沢孝子(9)、藤原邦宣(10)、宮口典之(11)がある。裁判の審問形式については、十重田が、他に「藪の中」「罪と罰」という典拠も提案している(12)。ただし、これらの模倣説の根拠は不明確で、裁判形式とプロットの類似性しか挙げられていない。

以上、「マルクスの審判」については、複数の問題意識に沿った論が展開されてきたが、マルクス主義批判という主題の当否や典拠の問題に決着がつけられた状況にあるとは言えない。これらの課題に答えるためには、まず、前稿「殺人者」を精読し、「マルクスの審判」との違いを検証する必要があろう。改稿の問題に触れた十重田論は注目されるものの、テキストに即したより詳細な分析が求められていると考える。本稿では、「殺人者」から「マルクスの審判」への改稿過程を分析することによって、「マルクスの審判」の典拠を明らかにし、その主題と方法に迫りたい。

第二節　「殺人者」の本文分析

まず、「殺人者」について確認していこう。次の引用は、「殺人者」の冒頭である。

市中を貫いて来た大道が坂になつて遊廓の街に流れ込む首の所を、鉄道が横に截つてゐる。大納言はそこの踏切の番人である。彼は独身者だつた。この独身者と云ふことが、最初から裁判官の胸の中に、彼に与へる判決の方向を大体に於て浮かばせてゐた。

鉄道の踏切で、轢死事件が発生した。被害者が轢かれる前に、一時的に鎖で被害者の体を止めたものの、結局止められなかった踏切の番人が「殺人者」の疑いをかけられ、審問されることになる。作品の冒頭、「この独身者と云ふことが、最初から裁判官の胸の中に、彼に与へる判決の方向を大体に於て浮かばせてゐた」という一文を通して、判事の独断的な態度が予め語り手によって読者に示されている。番人が独身であることをめぐって、審問が展開される。

「私はもう三度妻を変へたのです。」

「三度な？」と裁判官は一寸笑つた。「それはどうしてだ。」

「皆死んで了つたのです。」

「ふむ、それで来る者がなくなつたと云ふのだな。」
「多分さうでせう。それ許りでもありません。」
「何ぜだ？」
「三人とも同じ病気で死んだからだと思ひます。」（中略）
「お前は日頃通行人を余り早くから止め過ぎると云ふことだが、それはどう云ふつもりなのだ。」
「早くとめる方が安全で好からうと思ふのです。」
「それだけか。」
「それだけです。」
「面白いと思ふときがなかつたか、」
「たまにはそんなこともムいます。」
「何ぜ面白いと思ひ出したのだ。」
「解りません。」
「何日からそんな面白味を知り始めたのだ。」
「最初からです。」（中略）
「面白味を知り出したと云ふのは独身になつてからのことであらう。」
「さうではありません。」
「さうではないとどうして明瞭に云ひ得るのだ。」
　大納言は暫く黙つてゐてから次のやうな答へをした。
「何ぜだかあの道は自分のものだと云ふ気が始めからしてゐたのです。」
「それで自分の権利を濫用して早くから人々を止めてみることが面白くなつたと云ふのだな？」

「そんな気もありました。」
「さうであらう。」
「はい。」
「では何ぜ自分の面白味が解らないと今云つたのだ。」
「あなたが今教へて下さつたので成る程と思つた次第です。」
「あの道が自分のものだと云ふ気も独身になつてから思ひ出したのであらう。」
「さうではありません。」
「では今、そこで考へ出したと思はれたつて不服はないか？」
「それは困ります。」
「何故に困るのだ。」
「もつと初めからのことです」
「さう云ふのもお前の罪を軽くしたいと思つてゐるからであらう。」
「さうぢゃムいません。」

番人が独身であることに関心を持った判事は、番人が妻と三度も同じ病気で死別していることを聞き出す。そして、番人がいつも早めに鎖を引き、通行を止めることに着目し、その行動は面白いかどうか訊く。半ば強引に肯定的な答えを引き出すと、判事は番人に、何時から面白味を知り始めたのかと確認する。「最初から」という答えを得られると、判事は、その面白味は独身になってから覚えたものと決めつけ、番人の答えを否定する。

番人は判事の独断を否定するが、判事はさらに否定の理由を追及する。番人と判事の間で押問答が繰り返され、判事は、番人の反論を「罪を軽く」する手段と決めつけてしまう。その後、判事は踏切が遊郭の近くに位置することに注目する。

「泥酔者が坂を下つて来た時、お前はその男の行くさきを知つてゐたらう。」
「いずれ遊廓に行くんだらう位は思ひました。」
「お前は粋客を見るといつもどんな気がする。」
「慣れてゐるので別にどうとも思ひません。」
「それは慣れてゐるからだと自分で知つてゐるのか。」
被告は黙つてゐた。
「お前は遊廓に出入する男に対して嫉妬を感じたことがないか。」
「そんなこともたまにはムいました。」
番人は妻が三度も同じ病気で死んで以来、遊廓に行けなくなる。判事はそれに目を付け、遊廓客を見る時の気持ちを番人に確認する。番人は「慣れてゐる」と答えるが、判事は「慣れてゐるからだと自分で知つてゐるのか」と番人の答えを否定し、番人が遊廓客に嫉妬しているというような誘導尋問をする。冒頭で予告されたように、判事の審問は、事故を番人の独身という属性に結びつけようとする傾向が強く表れている。しかし、これらの誘導尋問はいずれもうまく行かなかった。判事は最後の手練を持ち出す。
「お前はお前のその夜の行為について万事正当だと思つてゐるだらう。」
「思つてゐます。」（中略）
「お前は妻が欲しからう？」
大納言は首を縦に動かした。
「お前は妻と子のある立派な男を殺したのだと思はないか。」
大納言は小さな声で「はい、」と答へた。
「お前にはもう楽しいことが何もないと云つても、あの男にはまだまだ世の中が面白かつたのだと思はないか。」

「はい。」
「あの男が死んだなら、妻と子供はどんなに困るかと思ふ。」
「お前はいい。お前はまだ一人で暮していける、だが、残つたあの男の妻と子供はたちまち困るではないか、たとひお前のしたことは正当であつたとしても、死人の妻と子供はお前を恨んでゐるにちがひない。矢張りお前に殺されたのだと思つてゐるにきまつてゐる。それにはいくらお前が正当だと云ひ張つてもさうは思ふまい。矢張殺したのはお前であつて外の誰れでもないではないか、」
裁判官は被告の頭がだんだん彼の膝の上へ垂れ下つて行くのを眺めてゐた。今だと思つた。どうだ、お前は鎖を故意に放したらう、さう彼は計画してゐた言葉を放たうとした時、被告は急に椅子から立ち上つた。彼は鉛色の顔をして怒つたやうに裁判官を睥んでゐた。が、涙を頬の上に辷らせると又椅子の上へ腰を下ろして俯向いて了つた。
判事の最後の手練は、番人に罪悪感を持たせることであった。判事は、自分の行動を正当と思うかどうか番人に確認し、肯定的な答えを得る。職分上の正当性がある以上、自分の行動が他者の死因になっても許されるという論理である。判事は、さらに独身という番人の不幸を利用して、被害者の幸福が番人の行動によって破壊され、その家族が不幸になったと番人に思い込ませている。番人の踏切で死人が出た以上、番人の行為はいくら正当であっても、結果には責任があるとして番人を責める。判事は、番人に罪悪感を持たせることに成功し、番人の精神を圧迫する。その日の審問はそのまま終了した。
裁判官は口のまわりを手巾で拭きながら幾分愉快な気になつて法庭を出た。が、控へのテーブルに凭れて茶を飲んでゐる時、ふと、事実、被告の云ふやうに故意に鎖を放したのではなくて、放れたのであるかもしれないとさう思つた。すると、手を変へ品を変へてして被告を思ふ壺に陥し入れた自分が少し不快になつた。が、「いや、存外あれで食へない男なんだ。」と又思ひ返して納得した。
その夜、裁判官は床へは入つてから新聞を読んだ。それから蒲団を被つて眼を暗くすると昼の審問を再び思ひ返

してみて、いづれあの事件は証拠の上らぬ限り殺人罪にはならないと思つた。しかし、自分は余り被告の独身者と云ふことに嫌疑をかけ過ぎてはゐなかつたか。（中略）

翌朝、裁判官は起きて縁側に出てみると霜が降りてゐて、庭の赤い寒菊の花まで白くなつてゐた。蘇鉄に屋根を造つてやらねばならぬと思つた。

そこへ妻が出て来た。そして、

「踏切りで番人が死にましたつて。」と告げた。

「何に、死んだ！」

彼は妻の顔を見たままぼんやりと立つてゐた。妻は又平気な顔をして向ふへ行つた。

彼は被告の死の原因について考へ始めた時何よりもさきに昨日自分の用ひた最後の手くだを思ひ出した。

「俺は正当だ！」と彼は呟いた。

が、それとは反対に、「俺が殺した、」と思ふ気持ちがだんだん底深く彼の胸の中に食ひ込んで来た。

彼は縁側の端から端へと幾回となく歩き始めた。

下女が庭から廻つて来た。

「旦那様、お湯をとりました。」

彼女はお辞儀をして退いた。

「いや、俺は正当だ！」と彼は立ち停つて又呟いた。

けれども、何が正当であるのか、何を云つてゐるのかそれすら自分に解らなかつた。

法庭を離れた判事は、番人が故意に鎖を放したわけではないという可能性に気づき、自分の誘導尋問に軽い不快感を覚える。独身者という先入観に影響されたことを意識しつつ、判事はそのまま眠りについた。

翌朝、番人の自殺を知らされた判事は、番人の死因を「自分の用ひた最後の手くだ」のせいだと思い、自分が番人を

殺したことを理解する。この現実に対して、判事は二回「俺は正当だ」と主張する。判事の審問が被告の死因になっても、自分は職分を果たしたにすぎず、責められるべきではないという論理である。

判事は、番人が主張する職分上の正当性を利用し、被害者の家族を持ち出して、番人に罪悪感を抱かせ、無意識のうちに番人の自殺を導いたのであった。番人の死の責任から逃れようとする判事は、自分の行動を職分によって正当化しようとしたが、同じ論理を用いて番人を攻撃したことに気づき、「何が正当であるのか、何を云つてゐるのか」理解できなくなる。誘導尋問の正当性を認めれば、番人の正当性も認めざるを得ない。轢死事故を番人のせいにすれば、判事も番人と同様に「殺人者」になる。こうした矛盾に直面した判事は、善悪の基準を理解し得なくなる。

第三節　典拠としてのフェリーの犯罪学

「殺人者」の判事を惑わせた正当性という問題は、犯罪学における不本意犯罪にかかわる問題意識である。横光は、エッセイ「無常の風」[13]において、次のように述べている。

> 人間の意志は気流の為に屈折する。意志は直線形に進行する性情があるが、途中で方向を変化さすのは気流の力が多大である。この法則は私の独断だとは思はない。アメリカの或る地方では東風が吹くと殺人犯が激増するといふ。フエリオの犯罪学には殺人者が殺人をする際、気流の温度の相違によつて忽ち狂人に変化し、殺人が不可能となつて逃亡する実例を上げてある。

ここで横光が取り上げる「フェリオの犯罪学」の「フエリオ」とは、イタリアの犯罪学者、エンリコ・フェリー（Enrico Ferri）のことである。横光におけるフェリー思想の受容は、第一章「横光利一「無常の風」論――天地人の文学――」[14]で詳細に論じたところである。フェリーの実証派犯罪学は、自由意志の否定を根本とする学説である。犯罪の原因を

犯人の意志にあるとする古典派犯罪学を攻撃し、善悪の観念を否定して、人間の行動が無意識のうちに周囲の環境に影響されることを主張している。不本意犯罪について、フェリーは、「実証派犯罪学」(15)において、次のように述べている。

同法典中には不本意の犯罪者も罰すべしと規定して居る。従つて不本意の殺人や傷害は、此種の自発的行為と同様に、収監を以て処罰せらる。是の如き場合には、結果を欲したのではなかつたのだが、行為が左様なつたのだと云はれて居る。若し猟師が籬を射ち突いて、人を殺したか傷けたかしたならば、彼は殺さうと欲したのではなくとも、彼の最初の行為即ち発射が自発的であつたが故に、彼は責任を負はされるのである。

その叙述は不本意的犯罪――若干の実証的行為に依つて為される所の――に適用される。然し過失と云ふ不本意犯罪に就ては如何うか？鉄道停車場に於ては列車の運転か人や物や観念の往来の日毎の廻転を代表して居るが、各転轍器は脱線に原因するデリケートな一器具たるものである。鉄道管理は此のデリケートな場所に転轍手を置いて勤務せしむる。然し疲労の瞬間に於て、又は長時間を非人間的に働かねばならなかつた為めに、彼の精神的弾力は総て疲労して、或は其他の理由で、転轍手が転轍することを忘れ、ために鉄道珍事を生じ、多くの人が死んだり傷ついたりする。此が初め彼のやらうと欲したことだと言へやうか？全くさうで無い。何故かなれば彼は何事もやらうと欲したことだと言へやうか？全くさうで無い。何故かなれば彼は何事もやらうと欲したのでなく、又為したのではないから。発砲した所の猟師は少くとも、発射の意志を持つて居た。然し転轍手は忘れやうと欲したのではなかつた(何故かなれば、該事件の時に彼は間接に咎められるであらうから)。彼は単に本当の疲労からして、自らの役目を為すのを忘れたのだ。彼は他に何等の企てを持つたのではない。かくても尚ほ諸君は彼に責を負はせんとするか？

フェリーは、当時主流であった古典派犯罪学に対して、鉄道転轍手の比喩を持ち出し、人間が長時間の疲労、あるいは他の理由で無意識に鉄道事故を招いたという状況を仮設し、古典派犯罪学を攻撃した。人間の行動は、無意識のうちに環境や条件に影響され、不本意の被害を招いたという状況にあって、いかに犯罪を定義するかという問題である。鉄道

における事故を題材としただけではなく、不本意犯罪の理論まで一致していることから見れば、「殺人者」は、フェリー「実証派犯罪学」における鉄道転轍手の一節を翻案した作品と考えられよう(16)。

フェリーは犯罪学者であると同時に、社会主義者であった。フェリーの社会主義は、マルクス主義と対立する思想である。フェリーは、マルクス主義の根本思想を、あらゆる社会現象を経済基礎に従うものと見なす「唯物史観」にあると考える。地形の推移を以て自然の変遷を説明し、経済制度も自然環境の所産と主張している。

片岡・岩上・伊藤が「マルクスの審判」「静かなる羅列」に見出した環境に操られる人間という主題は、自由意志を否定するフェリーの犯罪学に由来するものであった。両作におけるマルクス主義批判の要素も、経済を含む社会現象を自然の産物とするフェリーの社会主義と一致する。フェリーの思想を基盤とする点において、「マルクスの審判」は「静かなる羅列」と同系列の作品と言える(17)。この系列の理論と典拠は、いずれもフェリーに由来するものであったのである。

第四節　「マルクスの審判」の本文分析

「殺人者」の判事は、先入観をもって誘導尋問し、その誘導尋問が原因で、番人は自殺する。番人の自殺は、判事の思想を混乱させ、不本意犯罪という主題を引き出す機能を持っている。しかし、「マルクスの審判」には、番人の自殺は描かれていない。判事の描かれ方も大きく変化している。

「面白味を知り始めたと云ふのも、独身者になつてからではないかな。」

「いえ、それや、さうではございません。」

「ふむ、しかし、路をとめると云ふことは、そんなに面白いものかね。」

「何ぜだか、この路は俺の領分だと云つたやうな、そんな気がするんです。」

「なる程ね、お前の職業はただ気ばかり使ふだけで実の上らぬ仕事だから、面白くはなからうの。」（中略）
「あの道が自分のものだと思ひ出したのも、お前が独身者になつてからのことであらう。」
「いえ、さうではございませんよ。それはもう、私が務め出したときからでございます。」
「偽りを云つてはならぬ。」
「はい、それはもう最初からさう思つてをりました。」

「マルクスの審判」には、「殺人者」と同じく、通行人を止めることの面白味に関する審問が存在する。判事はその面白味は番人が独身になってからのことと推測するが、番人はこの推測を否定した。そして、独身者になって以来、道を「自分のもの」だと思うようになったという推測も、番人は否定する。「殺人者」の判事は、番人の否定を「罪を軽く」する手段と決め付けて否定し、事故を独身が故の犯罪と解釈としていたが、「マルクスの審判」の判事は、番人の否定に対してさほど強く否定しない。

「マルクスの審判」でも、番人が遊廓客を見た時の気持ちが訊問される。
「ふむ、覚えてはゐないか。お前はその酔漢を見たとき、どう思つたか、粋客だとは思つたらうね。」
「はい、いづれ遊興に行くとは思ひました。」
「その男は金持ちだつたかね。」
「はい。」
「お前はいつも粋客を見たとき、どんな気持ちが起るかね。」
「慣れてゐますから、別にどうと云ふ気も起りません。」
「お前の勤務時間は夜の十二時だつたね。」
「はい。」
「マルクスの審判」の番人は、「殺人者」の番人と同じように、「慣れてゐますから、別にどうと云ふ気も起りませ

ん」と答える。「殺人者」の判事は、番人の答えを否定し、番人が遊廓客を嫉妬しているというような誘導尋問をするが、「マルクスの審判」の判事は、それ以上に否定せず、次の話題に移っている。「殺人者」から「マルクスの審判」への改稿において、事故を独身が故の犯罪と決めつけようとする表現は、ほとんど削除されている。さらに、十重田が指摘したように、「殺人者」には存在しない、判事の心理描写が加筆される。

予審判事は、番人とはかやうな轢死を未然に防ぐための番人である以上、泥酔者の轢死は故殺であるかそれとも偶然の死であるかを探ぐるがため許りにさへも、そのときの争ひに作用した番人の心理の上に十分の疑ひを持たねばならなかつた。それに彼はその疑ひをなほ一層確実に疑ひ得られる様々の材料を発見した。第一に番人は貧しい独身者であつた。第二に轢死者は資産家の蕩児であつた。第三に番人のゐる踏切が遊廓街の入口であつた。

「殺人者」において判事の抱いた「独身者」という先入観は、「マルクスの審判」の冒頭において、「番人は貧しい独身者」「轢死者は資産家の蕩児」「踏切が遊廓街の入口」という三点に置き換えられている。判事の脳内で、労働者と資産家の階級対立が、遊廓街の入口という場所で結びつく。また、「殺人者」の「この独身者と云ふことが、最初から裁判官の胸の中に、彼に与へる判決の方向を大体に於て浮かばせてゐた」という独断的な態度に比べ、「マルクスの審判」では、判事の「疑ひ」という心理状態が重ねて強調されている。以下の引用は、番人の供述と、それに対する判事の心理である。

「はい、私はいつも一度鎖を引けば通る程の時間がございましても通さないことにしてをります。そのときも矢張り通しませんでした。するとあの男は、それぢや俺が通つてやると云つて私の引つ張つてゐる鎖の中程の所へ腹をあてて出ようとしたんです。私は必死の力で引いてゐたのですが、そのうちに私もそれについて二足三足曳かれてゆきました。（中略）それでも私はよほどぐつと鎖をひつぱつたつもりなんですが、その中に、風がサツと来たと思つたら、私の鎖を持つてゐる手がひどく痛かつたのを覚えてをります。さうしたら、何でもあの男は私の眼の前をぱつと飛んで行きました。」

判事は被告の話し方があまり整ひすぎてゐると思つた。

番人は、事件当時の様子を詳しく説明し、自分が最後まで被害者を阻止したと主張する。この供述の内容は、「殺人者」での供述とほぼ一致しているが、「マルクスの審判」では、供述の後、「判事は被告の話し方があまり整ひすぎてゐると思つた」という判事の疑念を示す心理描写が加筆されている。「事件の現状を目撃したものがなかつた」以上、本来、これは番人に有利な供述であるが、判事からみれば、あまりにも整合的で、逆に違和感をもたらす。ここでは、判事の疑い深い心理が表現されている。審問は続き、再び判事の心理が語られる。

判事はこのかなりに長い審問から、自分の質問の中心点である被告が性的な嫉妬から蕩児を轢殺したのかそれとも階級的な反感から轢殺したものかと云ふ疑ひを、相手に知らしめて了つただけで、ただ得たものは自身のその疑ひを僅かに強めることが出来たにすぎないと思ふと、彼の気持ちは一刻も早く被告に自白を迫りたくなつて来た。

それには、先づ何より被告の頭に激動を与へてかからなければ無駄だと知つた。

先入観にとらわれた判事は、自分の疑問を次々に確認するが、いくら確かめても次の疑問が生まれ、なかなか判断を下せない。こうした心理描写中にも、「疑ひ」という言葉が重ねて用いられている。考えあぐねた判事は、被告を自白させようとして、番人を挑発して怒らせることにした。それに成功した判事は、次のように述懐する。

判事は被告の怒つた顔を見てゐると、事実事件の当夜の被告の行為が自分の疑ひと一致してゐるとすれば、まさか今の場合さうむきに怒ることが出来なからうと思はれて、今迄感じてゐた自分の疑ひもいくらかとけた。しかし、被告の怒りもこちらの横車を押した論理のために怒つたものと思へないではなかつた。してみれば、被告の怒りも、別に、心に覚えのないことをあるやうに云はれたときの根深い怒りとも思はれなくなつて来て、結局判事にはまた以前の疑ひが疑ひとしてつきまとつて来た。

計画通りに怒った番人を目の前にした判事は、番人の激怒が、無実の証拠であるのか、それとも判事の誘導審問によるものか、また判断を下せない状態に陥った。この短い心理描写中に、「疑ひ」という言葉が四回も使用されている。

自分の疑念を解消できない判事は、最後の手練を持ち出し、番人に罪悪感を持たせる。それにも成功した後には、次のような心理描写がある。

判事はかうも手易く誘ひ込まれて来た被告を思ふと、急に今迄の勝ち誇つた気持ちが薄らぐのを感じた。そればかりではなかつた。彼は彼自身漸く握り得たと思つた疑ひの確証さへも再び前のやうに取り失つた。何ぜかと云へば、彼は自分の手段が自分ながらいかにも巧妙であつたと賞讃したい程であつたから。実際いかなるものと云へども、譬へばもしも明らかに故意の殺人ではなかつたと知り得ることの出来る判事自身でさへ、被告の立場に置かれたとき、その巧みな判事の言葉のために被告と同じ悲しみの言動に落されない者はあつたであらうか。それを思ふと、判事の疑ひは却つて彼自身の弁舌の巧みさに邪魔されてまた尽く迷蒙の中に這入つていつた。しかし、それかと云つて彼はまだ自分の疑ひを捨て去ることは出来なかつた。

番人を怒らせたときと同じく、判事のもくろみは成功したものの、番人の動揺は、事件によるのか、それとも自分の審問技術によるのか、判事には判断できない。この心理描写中にも、「疑ひ」という言葉が三回出現する。判事は「最も信用すべき自白」を得るためには、番人に「投げ与へた悲しみを逆に取り消」さなければならないと考え、番人を宥めることにした。判事による慰めは、「殺人者」にはない場面である。そして、番人を宥めることに成功した後にも、判事の心理が描かれる。

自分の言葉のために被告の態度がどんなに変つてゆくかと云ふことを眺めてゐた判事には、被告の様子がまだいかにも悲しさうに見えた。しかし、彼には被告の悲しみは自分に悲しめられた名残りの悲しみであるのか、それとも被告自身の秘めた行為を意識しての悲しみであるのか明瞭に見極めることが出来なかつた。そして、最早や判事は自分の疑ひを確証するいかなる方法をも案出することが出来なくなると、やむなくその日の審問はそれで終らなければならなかつた。

いくら宥めても悲しそうな番人を前にした判事は、その悲しみが審問の影響なのか、それとも「被告自身の秘めた行

為」によるものなのか、相変わらず判断できない。結局、自分の「疑ひ」を解消する方法を案出できないまま、仕方なく閉廷する。

その夜判事は床へ這入るとまたその日の審問を思ひ廻らした。――事実、被告は酔漢を突き飛ばしたものであらうか、それとも酔漢の死は被告の云つたやうに偶然の死であつたか――それにしても被告は自身に危険な言葉に対して、何ぜあれほども敏感であり得たか。それにも拘らず何ぜあれほど白々しく先手を打つて出て来たか。この二つの反した態度を審問に応じて巧みに変化さし得た被告を思ふと、判事の疑ひは又深まりかけた。しかし、一方は落されまいとし、一方は落さうと努めなければならない場合が場合であるだけに、それを感じた以上守らうとすることに専念する被告の気持ちはいづれ正当なものにちがひなかつた。所詮判事は昼の迷ひを迷ひ続ける以外に何の得る所もなくなつた。

床に入った判事は、昼間の審問に思いを巡らせ、番人の態度の巧みな変化に「疑ひ」の念を抱く。しかし、判事は、番人が自分のために弁護する正当性を認めざるを得ない。手練手管を使って番人の感情を揺さぶっても、番人の態度の真偽を見極めることは難しい。こうした矛盾に直面した判事は、解決策を案出できず、「迷ひを迷ひ続ける」ことしかできない。

「マルクスの審判」において加筆された判事の心理描写には、「疑ひ」の状態が一貫して強調されている。判事による慰めによって、番人は自殺する理由を喪失するが、番人を宥める行動は、結局、判決を下せない判事の心理から生じたものであった。では、横光は、なぜ、心理描写によって判事の「疑ひ」を繰り返し描いたのだろうか。この問いを解明することが、「マルクスの審判」の主題を解く鍵であろう。

第五節　「マルクスの審判」の主題

「マルクスの審判」の判事は、番人がいくら弁解しても自分の先入観を犯罪と結びつけようとする「殺人者」の判事のような強い意志の持ち主ではなく、なかなか判断を下せない優柔不断の人物として造型されている。自分の優柔不断に気づいた判事は、やがてその原因を考え始める。

一体何故に自分は自分の疑ひを疑ひとして持ち始めたか。何故に自分はその疑ひを疑ひとして深めてゆくことに努めたか。何故に自分は自分の疑ひの正当である可きことを確信したか。と、さう彼は考へ始めたとき、彼は自分が近年ひどく疑ひ深くなつて来てゐることを発見した。それには永年の判事生活から来る習慣が手伝つてゐることは勿論であるとしても、しかし、ただそれだけではなく自分の洞察力に対する深い自信と、それになほ油をかける神経衰弱とが原因してゐた。此の外にまだ大きな原因が一つあつた。それは彼が前に現下の最も人心の帰趨に多く関係を持つ思想と犯罪との接触点を検点しようとして、社会主義思想の書物を選んだとき、彼の手に入つたものは「マルクスの思想と評伝」と云ふ書物であつた。これを見ると、彼は世界の人心が目下の所資産家階級を撲滅しようとしてゐる無資産階級の団流と、それに対抗して無産家階級の力を圧殺しようとしてゐる資産家階級の団流とのこの二つの階級が、絶えず争つてゐるのを知つた。

判事は、自身の優柔不断の原因を、「永年の判事生活から来る習慣」、「自分の洞察力に対する深い自信」、それに拍車をかける「神経衰弱」に求め、それらがさらに「社会主義思想」との接触によって引き起こされたものと理解する。判事は社会主義との接触によって、階級対立の思考パターンを持つようになり、この対立構図を無意識のうちに事件に当てはめてしまう。これらの自分に影響を与える要素を意識できない判事は、単なる事故に対して、なかなか判断を下せなかったのである。

そのときから、十数万円の家産を持つてゐる判事の感情は、彼の理智がマルクスの理論の堂々とした正しさを肯定すればするほど、その系統に属する一切の社会思想に反感と恐怖と敵意とを持つにいたつた。（中略）

彼は前に被告が傭員の時間短縮を鉄道局へ迫つた事件に関係してゐたと云ふことを知つたとき、直ちに自分の社会運動を防衛したがる習慣的な恐怖が、審問の最初から自然被告を敵の立場に置いてかかつてゐたことに気がついた。（中略）

判事は自分のただ一片の不純な恐怖のために、無罪で済まされる可きその憐れな男を今にも重罪に落し込まうとしてゐた自分のことを考へた。彼は自分の罪を感じてひやりとなつた。

「無罪にしよう。無罪だ。」

さう彼はひとり決定すると、急に掌を返すやうな爽快な気持ちになつた。

「これや俺の罪ぢやないぞ。マルクスの罪だ！」

彼は突然に大声で笑ひ出した。

「いや、何に、かまつたことはない。証拠物件として何がある。蕩児よりも番人だ！」

今は判事も全く晴れ晴れとした気持ちであつた。そして、今迄長らく自分を恐喝してゐた恐怖も、不思議に自分から飛び去つてゐるのを彼は感じた。

判事は、自省によって、自分の思考に影響する諸要素を察知し、即座に無罪判決を下す。そして、優柔不断や恐怖から解放される。マルクスの階級対立の構図を以て現実を理解しようとしていた判事は、思考の迷路にはまり、そこからなかなか抜け出せない。ところが、人間の行動が無意識のうちに環境や条件に影響されるというフェリー流の思考で自分の行動を観察したとたん、優柔不断や恐怖から解放されたのである。「マルクスの審判」の結末は、フェリー理論の支持の立場から、マルクス主義を批判したものと理解できよう。

横光は、フェリーの「実証派犯罪学」を下敷として、人間の行動が無意識のうちに環境や条件に影響されるという思想を描こうとした。「殺人者」において、横光は、その主題を、番人の自殺という結末に集約した。番人を自殺させることによって、先入観の影響の大きさを、判事と読者につきつけたのである。「マルクスの審判」では、番人の自殺という結

末の代わりに、判事の自省が描かれる。審問における優柔不断は先入観に影響された結果であるという結論に判事みずから達するという方法で、読者に主題を伝えている。

第六節　結論

本稿では、「マルクスの審判」とその前稿「殺人者」が、フェリー「実証派犯罪学」の不本意犯罪の翻案であることを指摘した。この指摘によって、「マルクスの審判」が「范の犯罪」の模倣作であるという説は明確に否定されると考える。フェリーの社会主義は、彼の犯罪学と同じく、自由意志の否定を根本とする学説である。片岡たちが「マルクスの審判」に読み取った環境に操られる人間という主題、および、マルクス主義批判は、フェリーに由来する思想であった。

「殺人者」から「マルクスの審判」への改稿には、横光の表現手法の模索が窺える。「殺人者」では、番人の自殺という外発的事件を利用して、先入観に影響される人間の愚かさが描かれていた。「マルクスの審判」では、心理描写によって、先入観に左右される人間の内面が審理の経過とともに読者に示されている。心理描写は、横光が、自由意志を持たない人間の姿を描こうとした途上で案出した方法論であったと思われる。

古典派犯罪学では、人間の行動をその意志によるものとして、人間はその行動の結果に責任を負うべきものと考える。古典派犯罪学の立場に立つ「殺人者」の判事は、職分上の正当性を持つ番人を非難した結果、番人の自殺を招いた。番人と同じく職分によって他人を死なせたことに気づいた後、判事はジレンマに陥る。こうしたジレンマは、古典派犯罪学のジレンマである。

「マルクスの審判」には、「殺人者」のような判事と番人の関係性は描かれていない。審問の過程から事件の解決まで、完全なる判事の内面劇となり、マルクス主義批判の要素が加えられた。人間の行動が無意識のうちに環境や条件に影響

されるというテーマのもと、横光が古典派犯罪学からマルクス主義に批判の対象を変えたことは、犯罪の倫理という問題から、より大きな社会問題に関心を持ち始めたことを示していよう。

注、

（1）未発表原稿「殺人者」は、神奈川近代文学館所蔵。本稿では、『定本横光利一全集』補巻に拠った。

（2）片岡良一「新感覚派時代の横光利一」（『近代派文学の輪廓』、白楊社、一九五〇、初出『文学』（一九四一・八））一四一頁―一六一頁

（3）岩上順一『文学の虚実』（玄理社、一九四七）一九八頁―一九九頁

（4）伊藤整「解説」（『現代日本小説大系』第四十三巻、河出書房、一九五〇）三六九頁

（5）栗坪良樹「作品集「御身」をめぐって――主題の発見とその形成」（『國文學解釈と教材の研究』第十一巻第九号、一九六六・八）九八頁―一〇三頁

（6）十重田裕一「ドストエフスキー論の翻訳の試み――習作期における表現の模索」（『横光利一と近代メディア』、岩波書店、二〇二一。初出「大正九年・習作期横光利一の検討――「ドストエフスキー論（メレンヂコフスキー）」をめぐって」（『文学』第九巻第一号、一九九八・一））三頁―二八頁

（7）栗坪良樹「横光利一と志賀直哉」（由良哲次編『横光利一の文学と生涯』、桜楓社、一九七七）八四頁―九六頁

（8）宮越勉「志賀直哉の影響圏――横光利一の場合」（『文芸研究』第五十三号、一九八五・三）三六頁―六一頁

（9）柳沢孝子「「御身」に賭けられたもの――横光利一の第一創作集をめぐって」（『文学』第四巻第三号、一九九三・七）一三六頁―一四八頁

（10）藤原邦宣「横光利一の初期作品と〈形式論〉――「マルクスの審判」についての一考察――」（『岡大国文論稿』第二十六号、一九九八・三）四二頁―五一頁

（11）宮口典之「横光利一『マルクスの審判』を巡って――志賀直哉との関連を考えるための一考察」（『横光利一研究』第五号、二〇〇七・三）六三頁―七三頁

（12）十重田裕一「典拠の志向性――文壇登場の大正時代後期を中心に」（『横光利一と近代メディア』。初出「典拠の志向性――一九二三年、横光利一の文壇登場期を中心に」（『国語と国文学』第八十七巻第五号、二〇一〇・五）二九頁―四三頁

（13）横光利一「無常の風」（『文藝春秋』第三年第九号、一九二五・九）

（14）英荘園「横光利一「無常の風」論――天地人の文学」（『山口国文』第四十五号、二〇二二・三）二一頁―三四頁

（15）「フェリオの犯罪学」の引用は、浅野研真訳「フエリ実証派犯罪学」（『日本法政新誌』一九二四・五～十二）に拠る。

（16）引用した「フエリ実証派犯罪学」には、「猟師が籬を射ち突いて、人を殺したか傷けたかした」という「自発的」な不本意犯罪の話がある。横光の「寝園」（一九三〇年十一月八日から十二月二十八日まで（四十二回）『大阪毎日新聞』『東京日日新聞』に連載。一九三二年五月一日発行、『文藝春秋』第十年第五号から十一月一日発行、第十年第十二号まで（七回）連載）という小説は、猪狩の途中、自分の夫に襲いかかる猪に対し、これを救おうとした妻の引いた弾丸が夫に命中するという話である。その妻は、自分が意図的に主人を打ったかどうかを長らく理解できなかった。「寝園」の典拠も、「フエリ実証派犯罪学」に由来すると考えられる。

（17）岩上・伊藤が指摘する「人間社会や国家や民族間の葛藤や軋轢は、「自然」の力によるものであり、自然の地理的変化が、人間社会の興亡隆替を惹起する」「戦争と貧窮や富が自然によって決定されて現れる」という自然観については、拙稿「「静かなる羅列」論――「唯物史観」の相対化としての「地形輪廻説」」（『横光利一研究』第十九号、二〇二一・三）において考察した。

第三章　横光病妻小説の思想と方法

第一節　問題提起

一九二六年（大正十五年）六月二十四日、横光利一の妻、小島キミは、結核が原因で死去した。その後、横光は、病妻をモチーフとする一連の小説を発表する。横光の病妻小説には、次の五作品がある。

一九二六年八月「春は馬車に乗つて」（『女性』）
十月「蛾はどこでもゐる」（『文藝春秋』）
一九二七年一月「計算した女」（『新潮』）
「美しい家」（『東京日日新聞』十七日）
二月「花園の思想」（『改造』）

まず、研究史を概観しておこう。横光の病妻小説にかかわる言説は、一九五〇年代にはじまる。川端康成は、「春は馬車に乗つて」、「花園の思想」、「蛾はどこでもゐる」に横光の「温慈の愛情」(1)が含まれていることを指摘する。平野謙は、病妻小説に「妻の死を悼む哀切な人間感情」(2)を読み取る。伊藤整は、「春は馬車に乗つて」において、横光の作品がはじめて「人間的生気を強く放つものとなつた」(3)と評している。こうした妻への愛情を認める言説は、一九七〇年代以前に集中し、一九八〇年代以降はほとんど見られないようになっていく。

一九七〇年代後半、作品論が本格的に展開されるようになると、主人公の妻に対する愛情を主張する説は消え、主人公の内面を強調する説が出現しはじめる。岩尾正勝は、「花園の思想」を「自己の不幸だった青春と決別」(4)する作品と

みなす。梶木剛は、「犠牲に供さず死なせない」ことを重視し、病妻小説を「自己挽歌」(5)と位置付ける。玉村周は、「妻の病気という現実に対して、どう対処し、自らの態度をどう決して行くか」(6)をテーマと措定する。

二〇〇〇年代前後、主人公の心境に注目する説はほとんど行われなくなり、医学(7)、看護(8)、戯曲(9)、映画(10)、女性身体(11)、女性読者論(12)など、小説を取りまく同時代の情況に注目し、小説以外の知識で作品の解読を試みる傾向が顕著になる。

研究史全体を振り返れば、妻への愛情を認める言説も、夫の内面を強調する言説も、問題意識を病妻というテーマに限定し、病妻小説を横光文学全体と切り離す解読であったと言える。

こうした傾向にあって、日置俊次は、病妻小説を横光の実体験と結びつけて理解しており、注意される。日置は、新感覚派時代の横光文学を、初恋の少女の死、父の死、母の死、隣人の死、親友の死、友人の子供の死、妻の病没などの一連の凶事の所産と了解している(13)。ただし、横光の思想や作品の中に病妻小説がどのように位置づけられるかという視点での考察はいまだ行われていない。その内実を検討する前に、病妻小説の成立背景を改めて整理しておこう(14)。

一九二二年（大正十一年）八月、横光の父梅次郎が朝鮮で客死したのを機に、横光は母とともに渡鮮した。

一九二三年（大正十二年）五月、横光は、「日輪」「蝿」二作を以て、文壇デビューする。この年、小島キミと同棲しはじめる。

一九二五年（大正十四年）一月、横光の母こぎく死去。六月ごろ、キミの結核が悪化した。十月、その療養のため、神奈川県葉山町森戸の鈴木三蔵方に移る。

一九二六年（大正十五年）六月、キミは神奈川県三浦郡逗子町小坪の湘南サナトリウムで死去した。七月、横光は婚姻届を提出した。

一九二〇年代、横光は、妻の病没以外に両親の死も経験している。そして、その経験をモチーフとして小説やエッセイを創作している。病妻小説を含む、親族の死を題材とする創作やエッセイを列挙してみよう。

一九二五年三月　「青い石を拾ってから」（『時流』）
九月　「無常の風」（『文藝春秋』）
十一月「感想と風景」（『文芸時代』）
一九二六年七月　「寝たらぬ日記――湘南サナトリウムの病院にて」（『文芸時代』）
八月　「春は馬車に乗って」（『女性』）
十月　「蛾はどこでもゐる」（『文藝春秋』）
一九二七年一月　「青い大尉」（『黒潮』）
「計算した女」（『新潮』）
「美しい家」（『東京日日新聞』十七日）
二月　「花園の思想」（『改造』）

一九二五年三月、横光は、父の死を題材とした「青い石を拾ってから」を発表した。約二年後の一九二七年一月、「青い石を拾ってから」を改稿して「青い大尉」を発表している。この二作品は、横光の渡鮮経験に基づき、大筋はほぼ一致している。横光が、妻の病状が悪化する前に、親族の死をモチーフとする作品を創作していたことに注目したい。横光は、病妻小説群の執筆と並行して、父の死を主題とする作品を執筆しているのである。

本稿では、親族の死を題材とした横光の小説を、同じ思想に基づくものと措定する。一連の作品を通して、横光は何に向きあい、何を描こうとしたのだろうか。本稿では、右に一覧した関連作品の背景に存在する問題意識を考察し、その分析によって、横光病妻小説の背景にある思想の解明を目指したい。

第二節　自然と運命の関係

妻キミ闘病中の一九二五年九月、横光は、両親の死を端緒とするエッセイ「無常の風」を発表した。

幼い頃、「無常の風が吹いて来ると人が死ぬ」と母は云つた。それから私は風が吹く度に無常の風ではないかと恐れ出した。私の家からは葬式が長い間出なかつた。それに、近頃になつて無常の風が私の家の中を吹き始めた。先づ、父が吹かれて死んだ。すると、母が死んだ。私は字が読める頃になると「無常」の風とは「無情」の風にちがひないと思ひ出した。所が「無情」は「無常」だと分ると、無常とは梵語で輪廻の意味だと云ふことも知り始めた。「無常の風が吹いて来ると人が死ぬ」という母の言葉を聞いて育ち、やがて「無常とは梵語で輪廻の意味だ」という東洋的思考に至った横光は、両親の死を経験することによって、「無常の風」に別の意味を見出すようになる。

確かにある。無常の風に吹きつけられると人の血管が破れるのにちがひないと思つた。私は中学時代から地貌と云ふことに興味を持つてゐた。私は旅行をするといつもその土地の岩質に眼をつけた。河原を歩いても砂礫の質の相違によつて河の支流の拡がりを感じるのが面白かつた。しかし今は地貌の隆起に心がひかれる。隆起の相違によつて気流に変化があるのは当然だからである。此の気流と生活と云ふことは余程親密な相関性を持つてゐる。殊に人間の運命とは特にいちじるしい関係があると私は思ふやうになつて来た。人間の意志は気流の為に屈折する。意志は直線形に進行する性情があるが、途中で方向を変化さすのは気流の力が多大である。

横光は、「無常の風が吹いて来ると人が死ぬ」という言葉を、「無常の風に吹きつけられると人の血管が破れるのにちがひない」と解釈する。さらに、その発想を、以前から興味のあった「地貌」や「気流」と結び付け、地貌による気流が「人間の意志」に影響を与えると考える。そして、「人間の運命」が物理環境に左右されるという思考を展開する。

拙稿「横光利一「無常の風」論――天地人の文学――」(15)で、こうした思考の背景には、意識が物理環境に支配されることを主張するイタリアの犯罪学者・社会学者エンリコ・フェリーと、「地形輪廻説」(The Geographical Cycle) を創唱したアメリカの地質学者ウィリアム・モーリス・デイビスの思想があることを指摘した。フェリーは、物理環境が「神

経系統」を経由して、「器官的及び解剖学的体質」に影響することで、「人間活動」を支配すると論じた。デイビスは、地形は、「地殻運動」と「太陽の均平作用」の相克による輪廻の中にあると主張した。

東洋的運命観から出発した横光は、西洋科学にその理論的根拠を求めていったのである。エッセイ「無常の風」には、両親の頓死に端を発した「人間の運命」をめぐる考察が、社会の発展と人類の歴史に敷衍され、すべて自然現象の周期性に支配される「必然」と理解する横光の思考過程が開示されている。その思考は再び東洋思想に結びつけられ、「家相学」に言及する。

私の家でも窓の相違で部屋の空気の中に一定の通路が生じ、通路を外れた箇所で碁を打つと後が長く続かずに直ぐ頭が疲れて来る。だが通路の中で碁を打つと客観性が無くなつて喧嘩碁ばかり打ち始める。その代りに頭がいつまでも続いて行く。家相学では家の東南に桃の木があると淫風が吹くと書いてあるが、淫風は風の吹く所には起らない風である。

気流に屈折する「人間の意志」という発想から、横光は、家の構造に関心を向ける。人間の行動が家の構造に支配されるというテーマは、「無常の風」の二ヶ月後に発表されたエッセイ「感想と風景」に詳述されている。

契約した瞬間、ふと、「さて此の家は？」と考へた。左様に考へたと云ふ気持の中には、家全体から受ける感じに、一点「いやだ、」と思ふ感じがあつた。どこか明るい中に不思議な暗さが何ぜともなく心に残つたからである。

さて、いよいよ此の家に変つて来た。すると、北に連つた壁が絶えず私の心を圧迫した。すると、私は病気になつた。二ヶ月の間床にゐて、起き上がらうとすると、俄然として母が死んだ。と、次ぎには忽ち家人が病気になり出した。さうして一年が経過した。（中略）昨日私の友人の小児が死んだ。彼が新しく変つてからまだ二週間にもならないその家へ行つてみると、いきなり茶の間の壁から圧迫を感じた。私の家の壁と同じ圧迫感である。友人は門が北向きだからいけないのだと云ふ。が、私は此の壁だと云つた。変に心の眼前に絶えず突き立つてゐるやうな壁は呼吸器病を連れて来る。

新しい家を借りるときは、いつも壁を見るものだと私は思つてゐる。もし幾分の不満を忍耐して了つてゐると、いつの間にか、その一点の心の暗さが生活の中で尨大な翼を拡げて黙々と運命の上にのさばつてゐるものである。

新居に引っ越した横光は、その「壁」に圧迫感を覚える。引越後、家族は次々と病気になり、母は突然死した。その後、子供を亡くした友人の新居に行ってみると、やはり圧迫感のある「壁」が存在した。横光は、不幸の原因を「壁」がもたらす「呼吸器病」の影響と解釈するに至る。そして、家の構造という物理的条件が、人間の「運命」とつよい相関関係にあると述べる。

「感想と風景」は、キミの病状が悪化してまもない頃に発表されている。横光は、妻を亡くす以前、すでに「人間の意志」が物理環境に支配され、「人間の運命」が自然環境に決定されるという思想を形成していたのである。病妻小説の解読にあたっては、こうした横光の思想的前提を把握しておく必要がある。

第三節　病妻小説における運命観

キミの死から程なくして、『女性』一九二六年八月号に、病妻小説「春は馬車に乗つて」が発表された。主人公は、自身が経験した不幸に対して、次のように考える。

彼は妻を貰ふまでの四五年に渡る彼女の家庭との長い争闘を考へた。それから妻と結婚してから、母と妻との間に挟まれた二年間の苦痛な時間を考へた。彼は母が死に、妻と二人になると、急に妻が胸の病気で寝て了つた此の一年間の艱難を思ひ出した。（中略）

彼は自分に向つて次ぎ次ぎに来る苦痛の波を避けようと思つたことはまだなかつた。此夫々に質が違へて襲つて来る苦痛の波の原因は、自分の肉体の存在の最初に於て働いてゐたやうに思はれたからである。彼は苦痛を、譬へば

砂糖を甜める舌のやうに、あらゆる感覚の眼を光らせて吟味しながら甜め尽してやらうと決心した。さうして最後に、どの味が美味かつたか。――俺の身体は一本のフラスコだ。何ものよりも、先づ透明でなければならぬ。と、彼は考へた。

主人公は、打ち続く家族の凶事に伴う「苦痛の波」を避けようとはせず、「苦痛の波の原因」を「自分の肉体の存在の最初に於て働いてゐた」ものとする。苦痛の原因を家族の凶事に求めず、「自分の肉体」内に予め存在していたと理解し、それに逆らわない主人公は、自分の身体を「一本のフラスコ」として観察することに徹している。

一九二六年十月、妻の死の後日談「蛾はどこにでもゐる」が発表された。妻の没後、主人公は、一連の不思議な出来事に遭遇する。

彼は夜M町へ着くと、ホテルの日本間を借りて直ぐ仰向きに寢た。彼はのびのびと兩手を横に大きく擴げて出來るだけ大の字形になつてみた。彼はもうそこから出來ることなら動きたくはなかつた。しかし、もし本當に動かなくてすませるものなら、人の通らぬ野の雜草の中へ頭を突つ込んでいつまでも倒れてゐたかつた。

「どんな不思議なことがあらうとも、どんな奇怪なことがあらうとも、それは一體自分にとつてどうしたことだ。動くものは動くが良い。廻るものは廻るが良い。」

主人公は、「不思議なこと」、「奇怪なこと」に対して、悲観したり驚いたりせず、「動くものは動くが良い。廻るものは廻るが良い」という無抵抗の姿勢を示している。

一九二七年一月、同じく妻の死の後日談「計算した女」が発表された。妻を亡くした主人公の家に転がり込んで来た自分の読者であるお桂に対する心情を、主人公は次のように陳述する。

彼は彼からお桂を愛したのではない。お桂が彼に逢ひたいと云つて来て、逢ふと彼女は彼を愛すると云ひ出したのだ。そのとき、お桂はもう熱で立てないほど胸の病気が重つてゐた。彼女が彼に逢ひに来たときも、お桂は氷嚢を持つて傾いて歩いて来た。彼はお桂と同じ病気で亡くなつた妻の幻想を感じながら、妻の亡くなつた半ケ月目に、

またお桂の看病をしなければならなかつた。何ぜ彼はお桂から逃げることが出来なかつたか。彼は自分にさう訊ねることがある。しかし、彼はもう自分の運命にあきらめを持つてゐた。来るものは来るが良い。去る者は去るが良い。

主人公は、何の愛情も抱いていないお桂を、亡妻と同じ病気を抱えているというだけで、家に置いて看病する。「何ぜ彼はお桂から逃げることが出来なかつたか」と自分に問い質しつつも、うまく答えを探し出せず、「蛾はどこにでもゐる」の主人公と同じく、「来るものは来るが良い。去る者は去るが良い」という無抵抗の姿勢を示している。それは、「自分の運命にあきらめを持つ」態度であった。

病妻小説の主人公たちは、自分の「運命」に対して、あえて抵抗しない姿勢を貫徹し、自分が経験した苦痛を、あらかじめ決定されたものとして甘受している。横光病妻小説が、亡妻への追悼よりも、人間の運命観の表出を重視していることを見逃してはならない。

第四節　「美しい家」の本文分析

「感想と風景」発表の七ヶ月後にキミが死に、横光が「感想と風景」で予言した「運命」は現実となった。さらに七ヶ月後の一九二七年一月、横光は、「感想と風景」の内容をアレンジして、小説「美しい家」を創作する。

ある日、私は妻と二人で郊外へ家を見付けに出て行つた。同じ見付けるからには、まだ一度も行つたことのない方面が良いといふ相談になつた。

私達はその日一日歩き廻つた。夕方には、自分達の歩いてゐる所は一体どこなのだらうと思ふほどもう三半器官が疲れてゐた。

草に蔽はれた丘の坂が交錯し合つて穏かな幕のやうに流れてゐた。人家はばう〳〵とした草のために見えなかつた。

「おい、こゝはどこだらう。」と私は妻にいつた。

「私もこんな所知らないわ。」

「おれはもう、へとへとだ。」

「私もよ。私、もう歩くのがいやになつた。」

「ぢや、こゝで休まうか。陽が暮たつて、いゝぢやないか。」

「さうね、暮たつて別にかまはないわね。」

「休まう。」

私は草の中へ腰を降ろすと煙草を取り出した。妻も私の横へ座つて落ちついたらしく、暮て行く空の色を眺めてゐた。――

（こゝで、私と妻とが同じやうに疲れたといふことが、私達一家の間に、大きな悲劇をもたらした原因であつた。）

―――

○

しかし、私はたゞ何も知らずに煙草を吹かせてぼんやりとしてゐただけである。このぼんやりとしたゆるんだ心理の続いてゐる空虚な時間に、黙々として私達の運命を動かせてゐた何物かがあつた。それは一体何物であつたのか。私はふと、私のぼんやりしたその空虚な心のなかから、急に、かうしてゐてもはじまらない、今日中に家を見つけなければ、と思ふあわたゞしい気持ちが、泡のやうにぽつかりと浮き上つて来た。

「おい、もう一度家を捜さう。疲れついでだ。今日中に捜してしまつて、それからゆつくり落ちつかうぢやないか。」
「ええ、さうしませう。」と妻はいつた。
疲れてはいけない。疲れると判断力がなくなるものだ。私達は疲れた心でまた家を探しに出かけていつた。
ある草に包まれた丘の上に、私達は一軒の家を見つけ出した。
「あの家は貸家かな。戸が閉つてゐるね。あれは貸家だよ。」
私と妻とはいきなりその家の周囲をぐる〳〵廻つた。
「こゝはいゝね。高いし、庭は広いし、花はあるし、朝起きても日にあたれるし。」
私の言葉の速度が疲れた妻の心を動かした。
「ええ、いいわね、ここにしませうか。」
「ここにしよう、ここがいい。」
そこで二人は大家へ行つて部屋の様子をきき正した。私達はもう家そのものはどうでも良かつた。たゞ自分達の疲れた身体に一時も早く得心を与へるために直ぐその家を借りようといふ気になつた。
新居探しをする新婚夫婦は、一日中歩き廻つたことで、「三半器官」が疲れ、「丘の坂」の「草の中」に座つて休んだ。「三半器官」の疲れによつて「判断力」がおちた夫婦は、「丘の上」に一軒の家を見つけ出し、「疲れた身体に一時も早く得心を与へる」ために即決し、それがやがて「大きな悲劇」をもたらす。休憩の途中、主人公は、「黙々として私達の運命を動かせてゐた何物か」を知覚する。主人公の意志は、その運命と共に、「三半器官」を通して「何物か」の動きに巻き込まれていく。
新居に引っ越した直後、主人公は、「感想と風景」の横光と同様に、「壁」に違和感を覚えたが、なすすべもなく放置する。やがて、「壁」が原因で母が死に、妻も病気になった。「秋が深くなる」につれて、庭には、「薔薇」「菊」「枯葉」「山茶花」などの植物が入れ替わりつつ咲く。これらの植物の交替は、言うまでもなく、季節の推移を意味している。そ

の後、「いちご」「桜桃」「ぶだう」「百合」「薔薇」「おいらん草」が咲き続け、一年が経過した。

妻の青ざめた顔色は漸く花のためにやはらぎ出した。しかし、やがて、秋風が立ち出した。花花は葉を落す前に、その花を散らすであらう。

ある日、私は、私達をこの家へ導き入れた丘の上へ行つてみた。私は二人で休んだ草の中へ座つてみた。そこで私は、かつて前に、疲れた心をぼんやりとさせたやうに、今また不幸に疲れた心をぼんやりと休めてみた。私は私の心の中から、何か得がたい感想が浮び出しはしないかと待ちながら。だが、私の胸の中からは、何物もわき上つては来なかつた。私は私の心に詮つてゐるものをふるひ落とすやうに、私の心をたゝいてみた。

「生活とは何か。」

苦しむことだ。――

「苦しみとは何か。」

喜ぶためだ。――

「喜びとは何か。」

生活することだ。――

「それなら、生活とは。」

私は白い草の根をかみながら立ち上つた。ふと、私はその草の根が、去年の秋、私達が座つて踏みつけたときの草の根に相違ないと考へた。それが一度葉を落してまた芽を出した。私達も廻るであらう。今に、不幸が亡くなるだらう。――

私は家へ帰つて来た。家の小路の両側は桃色の花で埋まつてゐた。この棚びく花の中に病人がゐようとは、何と新鮮な美しさではないか。と私はつぶやいた。

「秋風」が再び立つ頃、主人公は、「丘の上」に行って、去年と同じ「草の中」に座ることになった。彼は自身に向け

て、「生活とは何か」と問い、「苦しむことだ」と答える。「苦しみとは何か」と問い、「喜ぶためだ」と答え、「喜びとは何か」と問い、「生活することだ」と答える。もう一度「それなら、生活とは」と疑問を示して、「白い草の根をかみながら立ち上つ」た際、「ふと」、この「草の根」を去年座った「草の根」に違いないと意識し、それが「一度葉を落してまた芽を出した」のだと悟る。

「美しい家」の下敷きとなった「感想と風景」には、「さうして一年が経過した。此の間に周囲の庭は緑の中で苺を成らせ、葡萄の房をしだれさせ、無花果と栗と小梅の実を累々と実らせた」という一文がある。「美しい家」において、横光は、季節の推移に沿う植物の栄枯を詳細に表現しなおしている。横光が植物の栄枯の交替によって季節の推移を表現したのは、単なる時間経過の描写のためではない。地球の公転と共に、地上に生きる生命も環境の変化によって移り変わってゆくことを表現していると考える。一年が経過し、「草の根」が「葉を落してまた芽を出した」ことは、公転の周期による、新たなる生命の輪廻の始まりを意味していよう。主人公は、「草」の再生とともに、「私達も廻るであろう」という。植物の栄枯と同様に、人間の苦痛も悦楽も、自然の輪廻と共に廻っていく。「それなら、生活とは」の答えを、主人公は、自然とともに廻ることに求めたのである。

主人公が悟った自然の輪廻こそ、一年前に同じ所で感じ取った「運命を動かせてゐた何物か」の正体と言えよう。「美しい家」は、輪廻の始まりと終わりを同じ「丘の上」に設定することで、冒頭と結末の照応をはかっている。「今に、不幸が亡くなるだらう」という一文は、間もなく訪れる妻の死によって、一つの生命の周期が完結することを暗示している。そして、死にゆく妻の存在によって、家が「新鮮な美しさ」を呈したのは、主人公があらゆる不幸と苦痛を自然の秩序として積極的に理解し始めたことを物語っている。

「美しい家」には、自然環境に支配される存在としての人間を素材として、生命そのものが周期的自然現象であるという思想が描かれている。「この棚びく花の中に病人がゐようとは、何と新鮮な美しさではないか」という主人公のつぶやきには、生命の終結を、自然と約束した「美しい」ものと理解する横光の思考が投影されている

第五節　「花園の思想」の本文分析

横光は、親族の死をモチーフとする小説と並行して、「地形輪廻説」に基づく小説「静かなる羅列」（『文藝春秋』第三年第七号、一九二五年七月）を発表し、「無常の風」の中で指摘されている「準平原の輪廻作用」と「社会現象」の関係を追求した(16)。

拙稿「「静かなる羅列」論――「唯物史観」の相対化としての「地形輪廻説」――」(17)で論じたように、横光は、「静かなる羅列」において、人間社会の盛衰興亡を、地形の輪廻と軌を一にして描いた。自然資源に頼って生きる人類は、資源をめぐる競争を繰り返す。地形の輪廻は資源の再分配をもたらし、勝因は次の敗因につながり、敗者は勝者に転じる。誰も永久に優位に立つことはできず、人間は決して自然の摂理から逃れられない。小説の結末において、人間の文明は、地形の輪廻と共に壊滅していく。

これらは前章まで論じてきた「「人間の意志」が物理環境に支配され、「人間の運命」が自然環境に決定されるという思想」や、「自然環境に支配される存在としての人間を素材として、生命そのものが周期的自然現象であるという思想」につながっている。そして、同じ「思想」に基づく問題意識は、病妻小説「花園の思想」においても認められる。

「花園の思想」の主人公は、結核治療のために、妻を山上の「肺病院」に入院させる。そこは「新鮮な空気と日光」が豊かで、「海と山との調味豊かな品々が時に従つて華やかな色彩で食慾を増進」させる。「しんしんと耳の痛む静けさ」の支配する環境下、物音は「患者の咳と、花壇の中で花瓣の上に降りかかる忍びやかな噴水の音ぐらい」に過ぎず、患者の「安眠」を保証する。この「肺病院」は、病人を回復させるためのあらゆる資源を備えていた。しかし、この天国のような「肺病院」は、「海村」との紛争に巻き込まれていく。

梅雨期が近づき出すと、ここの花園の心配は此の院内のことばかりではなくなつて来た。麓の海村には、その村全体の生活を支へてゐる大きな漁場がひかへてゐた。上に肺病院を頂いた漁場の魚の売れ行きは拡大するより、縮小するのが、より確実な運命にちがひない。麓の活躍した心臓を圧迫するか、頂の死に逝く肺臓を黙殺するか、此の二つの背反に波打つて村は二派に分れてゐた。既に決定せられたがやうに、譬へ此の頂きに療院が許されたとしても、それは同時に尽くの麓の心臓が恐怖を忘れた故ではなかつた。

間もなく、これらの腐敗した肺臓を恐れる心臓は、頂の花園を苦しめ出した。彼らは花園に接近した地点を撰ぶと、その腐敗した肺臓のために売れ残つて腐り出しただけの魚の山を、肥料として積み上げた。忽ち蠅は群生して花壇や病舎の中を飛び廻つた。病舎では、一疋の蠅は一挺のピストルに等しく恐怖すべき敵であつた。院内の窓と云ふ窓には尽く金網が張られ出した。金槌の音は三日間患者達の安静を妨害した。一日の混乱は半ケ月の静養を破壊する。患者達の体温表は狂ひ出した。

しかし、此の肺臓と心臓との戦ひはまだ続いた。既に金網をもつて防戦されたことを知つた心臓は、風上から麦藁を燻べて肺臓めがけて吹き流した。煙は道徳に従ふよりも、風に従ふ。花壇の花は終日濛々として曇つて来た。煙は花壇の上から蠅を追ひ散らした勢力よりも、更に数倍の力をもつて、直接腐つた肺臓を攻撃した。患者達は咳き始めた。彼らの一回の咳は、一日の静養を掠奪する。病舎は硝子戸で金網の外から密閉された。部屋には炭酸瓦斯が溜り出した。再び体温表が乱れて来た。（中略）

かうして、彼の妻はその死期の前を、花園の人々に愛されただけ、眼下の漁場に苦しめられた。しかし、花園は既にその山上の優れた位地を占めた勝利のために、何事にも黙つてゐなければならなかつた。彼の妻は日日一層激しく咳き続けた。

横光は、ここでも「運命」という言葉を用いて、「肺病院」と「海村」の紛争を、「既に決定せられた」「確実な運命」とした。「肺病院」の下方の麓に位置する「海村」は、山上にある死に逝く患者の存在によって、魚の売れ行きの減少を

余儀なくされる。村民は「腐敗した肺臓」に恐怖を覚え、「戦ひ」をはじめる。「海村」は、「花園に接近した地点を撰び、「腐り出しただけの魚の山を、肥料として積み上げ」、蠅を花壇や病舎に送り出し、「肺病院」を攻撃した。病院側の対策としての金網の工事で、患者達の静養は破壊され、その病状は悪化する。さらに、村民は「道徳に従ふよりも、風に従ふ」煙を利用して、風上から麦藁を燻べて、腐った「肺臓」を攻撃した。病院では対策として硝子戸を張ったが、部屋に「炭酸瓦斯」が溜り、患者達の病状はいっそう悪化していく。主人公は、妻が「漁場に苦しめられた」理由を、「既にその山上の優れた位地を占めた勝利のため」と理解している。ある日、麓の方に降りていった主人公は、漁場の状況を目のあたりにする。

事実彼にとつて、眼前の魚は、煙で彼の妻の死を早めつつある無数の勇敢な敵であつた。と同時に、彼女にとつては、魚は彼女の苦痛な時期をより縮めんとしてゐる情けある医師でもあつた。

主人公は、魚が妻の死を早めつつあるという「事実」を発見する一方、それを妻の「苦痛な時期」を縮減する「情けある医師」と見る逆転的な発想を抱く。紛争をめぐる思考は、作品の終盤に向けてさらに発展していく。

もし吸入が永久に妻の苦痛を救ふものなら、彼は永久にその口を持ち続けてゐたかつた。だが、此の眼前の事実のやうに、吸入がただ彼女の苦しみを続けるためばかりに役立つてゐるのだと思ふと、彼は彼女の生命を引きとめようとしてゐる薬材よりも、今は、彼女の生命を縮めた漁場の魚に、始めて好意を持ちたくなつた。

妻の死の間際、主人公は、妻の生命を延長するための治療を「彼女の苦しみを続ける」こととし、それを再び「事実」として強調する。そして、自分から妻の「生命を縮めた」紛争の原因である漁場の魚に、かえって「好意を持ち」始めるのである。

「花園の思想」の主人公は、死にゆく妻を見つめることはせず、紛争をめぐって思考し続けている。紛争が「花園の思想」の主軸であることは疑いがない。その紛争に対する姿勢も、抵抗から賛美へ転換する。「力の及ぶ限り死と戦つた」主人公は、妻の死を期待するように変わってゆくのである。

しかし、彼女はもう答へなかつた。彼女の呼吸は、ただ大きく吐き出す息ばかりになつて来た。彼女の把握力は、刻々落ちていく顎の動きと一緒に、彼の掌の中で木のやうに弛んで来た。彼女は動きとまつた。さうして、終に、死は、鮮麗な曙のやうに、忽然として彼女の面上に浮き上つた。

――これだ。

彼は暫く、その眼前に姿を現はした死の美しさに、見とれながら、恍惚として突き立つてゐた。と、やがて彼は一枚の紙のやうにふらふらしながら、花園の中へ降りていつた。

妻の死の瞬間を眼前にした主人公は、まるで狙った獲物に対するように、「これだ」と思う。その死を悲しまず、期待していた「死の美しさ」に見惚れて「恍惚」とする。

横光は、エッセイ「寝たらぬ日記――湘南サナトリウムの病院にて」において、湘南サナトリウムで実際に経験した看病生活を、「海は山と山との間から、嚴格な朝の挨拶をし始めた」と記述している。現実の「花園」である湘南サナトリウムは、山上ではなく山麓にあったのである。神奈川県逗子市小坪に位置する湘南サナトリウム（現・逗子ヘルス・ケア・マンション）[18]は、確かに、海に面した「山と山との間」という風通しの良い場所にある。『婦女界』掲載記事「肺患者の楽園――湘南サナトリウムを訪ねて」では、湘南サナトリウムの概観について、次のように説明されている[19]。

湘南サナトリウムは、恰度鎌倉と逗子との中間で、三方は常緑の小山脈で囲まれ、僅かに西南の一面だけが開らけて、そこからは渺々たる相模湾が、穏やかな春光を享けて鈍く光つてゐるのが瞰下ろせる約一万坪の高台にあります。海岸からは約五六丁離れてゐますから冬季は寒冷な北風を防ぎ非常に温暖で、夏季は海から来る微風が涼しく空気は清浄で、日光は紫外線を多量に含んでゐますから、治療上非常に有利で肺病療養所としては、絶好の好適地です。春霞の彼方には富士が夢のやうに浮び、東京ではまだ桜も開いてゐないのにこゝは、桜の花が満開で、青々とした芝生の上をやはらかな春風が小鳥の声をのせて吹いて行く、桃源のやうな楽園です。

横光は、「桃源のやうな楽園」である湘南サナトリウムをモデルとしながら、現実の状況とは逆に、その位置をあえて

山上に設定した。そして、「寝たらぬ日記」にも、「此處の山には蠅が多い。病人は一日、天井にとまつてゐる蠅の數を算へてゐた」という蠅の話、「煙草を一本吸ふ暇を見つけるためには、小説の題を考へる程の才智が必要になつて來た」、「此處は肺病院であるが故に、煙りと云ふ奴は敵である。少くとも、煙りは人間の道徳に從つて決して動いたためしがない」という煙と道徳の話がある。横光の実体験においては、蠅も煙も、村人が故意に送りこんだものではなかったのである。

横光は、山という地形に着目し、「肺病院」を山上に、その対極の麓に「海村」を配置することで、「花園の思想」に二勢力を仮構した。さらに、蠅と煙の話を脚色して、紛争に翻弄される妻の運命を虚構した。山上に建設された「肺病院」によって、「海村」の資源は圧迫される。主人公は、当初、妻を入院させ、治療させて運命に反抗しようとするが、それがかえって、妻の死を加速する。運命の不可避を悟った主人公は、徐々に妻の死を早める行動を賛美するようになる。最終的には、「美しい家」の主人公と同じく、積極的に「死の美しさ」を鑑賞できる境地に達している。

第六節　結論

従来、横光の病妻小説には、妻への愛情を主張する説と主人公の内面を強調する説という二つの流れがあった。いずれも病妻を第一義的なものとし、病妻をめぐる問題意識に注目した論であった。それに対し、本稿では、同時期に発表された親族の死をモチーフとする作品群の中に病妻小説を位置付け、同じ問題意識を持つことを指摘した上で、その問題意識の析出を試みた。

本研究では、親族の死をモチーフとする横光文学の作品について、発表の時系列に即してテキストを分析した。作品の対象こそ変わるものの、一連の作品に一貫するキーワードは「運命」である。主人公たちは、死にゆく人間を見つめる

ことをせず、不幸に対してあらがわない姿勢をとり、それぞれの運命論を展開していく。自然の周期の中に人間の生死を統合した運命観こそ、このシリーズの真の主題と考えられよう。

一九二〇年代、横光は、「無常」「輪廻」などの東洋的運命観から出発し、それを理解すべく、西洋科学にその理論的根拠を求めていた。個人の運命から出発し、社会の発展と人類の歴史さえ、自然現象の周期性に支配される「必然」とする思想が形成される最中に、横光は、親族の死を次々と経験する。

親族の死をモチーフとする横光文学は、感情の吐露を優先した写実的作品ではなく、思想の伝達を第一目的とし、理性に基づいた創作である。横光の「運命」に対する態度は徐々に変化し、消極的な無抵抗の姿勢から、積極的に自然の摂理として納得し、「死の美しさ」を認める境地に到達する。横光は、感情に流されることなく、理性によって、妻の死を法則的必然として、永遠に自然に刻み込もうとしたのである。

注、

（1）川端康成「解説」（『機械　他九篇』、岩波書店、一九五二）

（2）平野謙「解説」（『現代文豪名作全集』第二十巻、河出文庫、一九五三）

（3）伊藤整「横光利一文学入門」（『文芸』第十二巻第八号、一九五五・五）

（4）岩尾正勝『横光利一論』（村松書館、一九七五）

（5）梶木剛『横光利一の軌跡』（国文社、一九七九）

（6）玉村周「「春は馬車に乗つて」と「花園の思想」――〈花園の思想〉の崩壊――」（『横光利一――瞞された者――』、明治書院、二〇〇六。初出「横光利一・「春は馬車に乗つて」と「花園の思想」――《花園の思想》の崩壊――」（『土浦文学』第二十一号、一九八〇・七））

（7）張建明「横光利一と結核――結核的日常と近代人の不安――」（『国際日本文学研究集会会議録』第二十号、一九

九七・十）

（8）芳賀祥子「〈ケア〉の苦闘――「春は馬車に乗つて」における「病まう妻」と「看取る夫」――」（『横光利一研究』第十二号、二〇一四・三）

（9）十重田裕一「「春は馬車に乗つて」のドラマツルギー」（『日本近代文学』第五十七号、一九九七・十）

（10）友添太貴「死の「曙」を越えて――横光利一「花園の思想」と同時代フランス映画」（『日本文学』第六十七巻第十二号、二〇一八・十二）

（11）内藤千珠子「「春は馬車に乗つて」――病と女性身体の表象――」（『横光利一の文学世界』、翰林書房、二〇〇六）

（12）塚本飛鳥「婦人雑誌『女性』の中の「春は馬車に乗つて」」（『緑岡詞林』第三十八号、二〇一四・三）

（13）日置俊次「横光利一試論――『春は馬車に乗つて』における死の象徴化――」（『日本近代文学』第五十五号、一九九六・十）

（14）横光病妻小説の成立背景については、井上謙『評伝横光利一』（桜楓社、一九七五）、『定本横光利一全集』第十六巻（河出書房新社版、一九八七）、井上謙・神谷忠孝・羽鳥徹哉編『横光利一事典』（おうふう、二〇〇二）の年譜を参照。

（15）英荘園「横光利一「無常の風」論――天地人の文学――」（『山口国文』第四十五号、二〇二二・三）

（16）横光は「無常の風」の後半部で「地貌の運動作用、特に準平原の輪廻作用を思ふと私は社会主義者にならざるを得なくなる」と述べており、これについては注（15）の拙論の中で詳しく論じている。

（17）英荘園「「静かなる羅列」論――「唯物史観」の相対化としての「地形輪廻説」――」（『横光利一研究』第十九号、二〇二一・三）

（18）湘南サナトリウムの位置について、山本洋「横光利一と病妻者の周辺」（『考証論究近現代文学』、日本図書センター、二〇〇四。初出「「春は馬車に乗って」と「花園の思想」の背景」（『龍谷大学論集』第四三四・四三五合併号、

一九八九・十一）では、「神奈川県三浦郡逗子町小坪（現・逗子市小坪三丁目二番）の湘南サナトリウム」と記している。

（19）「肺患者の楽園――湘南サナトリウムを訪ねて――」（『婦女界』第五十一巻第五号、一九三五・五）

第四章　横光利一「機械」と『化学本論』

第一節　問題提起

「機械」は、一九三〇年（昭和五年）九月発行の『改造』第十二巻第九号に発表され、一九三一年（昭和六年）四月、白水社発行『機械』に収録された、横光利一の小説である。

「機械」には、「絶えず私たちを計つてゐてその計つたままにまた私たちを押し進めてくれてゐる」「見えざる機械」という存在が登場する。その「近づいて来る機械の鋭い先尖」に狙われた「私」は、狂人となっていく。以下、本稿では、「見えざる機械」を〈機械〉と表記し、作品名と区別する。

「機械」の先行研究において、〈機械〉はさまざまな言葉で説明されてきた。谷川徹三は、「機械」に、「気づかないうちに」「ひそかに恐れてゐる出来事」を引き起こす「かくれた必要の力」の存在を読み取る(1)。井上良雄は、「人間にとつて、世界とはまことに一個の「機械」」と述べ、「われわれの後にある巨大な「機械」」を動かす「眼に見えぬ宿命の鬼」の存在を仮設する。「われわれの上には一個の」、「勝つすべのない巨大な必然の法則」があるとし、エッセイ「文字について――形式とメカニズム――」でいう「メカニズム」の理論で〈機械〉を把握している(2)。

畑井俊幸は、〈機械〉を、「地球と言う一つの「生物と環境」を呑んだクローズド・コミュニティ」と理解する。「想像もつかない大きな自然の力によって」、地球は「バランスを保ちつつ動かされている」。「地球のシステムの法則性」によって、個人の行動は「予定されているように歯車が仕組まれていた」と解読している(3)。

河田和子は、「主人を、機械という物理法則的なものに支配されている一人」と理解し、〈機械〉を「人間社会を超えた

もう一つ大きなレベルとして、自然法則」としている(4)。濱川勝彦も、「「機械」と言う言葉」を、「人間の意思や人間関係とは無関係に世界を動かす巨大な「原理」を表すもの」と解釈し、〈機械〉を、「人間関係」「個々の「自意識」」「人間の善意や悪」とは無関係に、「それら総てを包んで押し流す大きな力」と理解している。(5)。

これらの解釈は、表現こそ異なるものの、「機械」に自然の法則性を読解する点で一致している。その法則性に、観測不能の属性を読み取り、人間はそれに逆らえないとする点も共通している。しかし、その背後にある思想については、いまだ詳しく説明されていない。さらに、自然の法則性というモチーフと「私」の狂人化というプロットの関係性も解明されていない。本稿では、自然の法則性を「機械」のモチーフとする前提にたち、横光がその法則性をどこから学び、どのように形成したのか、考究しつつ、「機械」の解読を試みる。

第二節　化学用語と作業工程の典拠

「ネームプレート製造所」を舞台とする「機械」には、大量の化学用語が出現する。その用語を表1に示す。

塩化鉄
臭素
真鍮
エーテル
重クロム酸
アニリン
カルシウム
ビスムチル
クロム酸加里
アルミニューム
カセイソーダ
蒼鉛
珪酸ジルコニウム
セレニウム
アンモニア
塩素

表１

これら化学用語の出典については、従来、考察されて来なかった。横光は、「機械」の執筆にあたり、これらの化学知識をどこで学んだのだろうか。

「機械」の発表前後、横光は、エッセイにおいて、「片山正夫博士の化学本論」(6)「片山博士の科学論」(7)に言及し、その著作『化学本論』を引用している。片山正夫は、一八七七年に生まれ、一九六一年に没する日本の物理化学者である。東北帝国大学理科大学教授、東京帝国大学教授を歴任し、一九一五年、内田老鶴圃より、『化学本論』を出版した(8)。次に、『化学本論』の「序言」を引用する。

化学本論に於ては一々の化合物の性質変化を主眼とせず、一般に亘る根本的関係を説述するを以て目的とする。化学本論の急速なる発展は、化学研究の内容をして殆ど一変せしめたると同時に、その応用方面に於ても多大なる影響を及ぼした。今日冶金学或は化学製造工業に従事する人は、化学本論の根柢に於て確乎たる素養なき時は、到底日進月歩の学説技術の戦場に角逐することは出来ぬ。又医学に志す人は日々化学本論の応用増進するを見て、この部門の智識が絶対必要なる事を唱へぬものは無い。此等の人士に向つて有力なる武器として活用し得べき程度に新化学を説述せる書は、未だ邦語の著書中に之を発見するに苦む。是れ著者が自ら揣らず本書したる第一の動機である。(中略)

化学本論を説述するに当つて、往々熱力学を回避し或は後回しとしたる書もある。然も此根柢的原則に於て充分な理解を欠く時は、平衡論は其正味を失ふことになつて仕舞ふ。

『化学本論』は、「熱力学」を「根柢的原則」として、系統的に化学の「根本的関係」を説明することを目的とした日本最初の化学教科書である。横光における『化学本論』の受容については、山本亮介の指摘がある(9)。山本は、横光のエッセイ「文字について――形式とメカニズム――」における「メカニズム」「エネルギー」などの概念が、「ほぼ原文に近い形」で『化学本論』を引用して書かれたことを指摘している。山本の指摘は、高橋幸平・加藤夢三による横光論(10)にも継承されている。山本は、「横光の科学理論に対する理解の程度」の分析を避け、それを「素人科学的記述」と片付

けた。この観点を受け継いだ高橋も、「横光の科学的知識は正確さを欠く」ものと考えている。加藤も、横光の科学受容の「理解度の不審」を認める立場に立つ。これらの先行研究が、横光の科学理解に対して否定的前提をとったことは、横光の科学受容を細部まで考察する可能性を閉ざす結果につながっているのではなかろうか。横光文学を理解する要諦は、彼が科学を正しく受容したかどうかではなく、どのように科学理論を受容したかを解明することであると考える。そこで、以下、横光が『化学本論』の理論をどのように受容し、作品に敷衍していったのかという点を考察していきたい。

表2は、「機械」における化学用語を『化学本論』における化学用語と対比したものである。

「機械」	『化学本論』
塩化鉄	塩化鉄
臭素	臭素
真鍮	真鍮
エーテル	エーテル
重クロム酸	重クロム酸
アニリン	アニリン
カルシウム	カルシウム
ビスムチル・蒼鉛	蒼鉛
クロム酸加里	クロム酸加里
アルミニューム	アルミニウム
カセイソーダ	苛性曹達
珪酸ジルコニウム	ジルコニウム
セレニウム	セレニウム
アンモニア	アンモニア
塩素	塩素

表2

「機械」における化学用語は、全て『化学本論』に出現する言葉である。これらの用語は、『化学本論』第十編「原子分子論」に集中している。

「機械」では、「セレニウムの赤色塗の秘法」を知る主人の指示に従って、ネームプレートの染色工程が断片的に示されている。その工程を⑴〜⑷として、本文の順に引用する。

⑴此の穴へ落ち込むと金属を腐蝕させる塩化鉄で衣類や皮膚がだんだん役に立たなくなり、

⑵屋敷の仕事は真鍮の地金をカセイソーダの溶液中に入れて軽部のすませて来た塩化鉄の腐蝕薬と一緒にそのとき用ひたニスやグリユーを洗ひ落す役目なのだが、

⑶その彼の魅力は絶えず私へも言葉を云ふ度に迫つて来るのだが何にせよ私はあまりに急がしくて朝早くから瓦斯で熱した真鍮へ漆を塗りつけては乾かしたり重クロムサンアンモニアで塗りつめた金属板を日光に曝して感光させたりアニリンをかけてみたり、

⑷だいいち暗室の中には私の苦心を重ねた蒼鉛と珪酸ジルコニウムの化合物や、主人の得意とする無定形セレニウムの赤色塗の秘法が化学方程式となつて隠されてゐるのである。

「機械」における「セレニウムの赤色塗の秘法」とは、「重クロム酸」と「塩化鉄」を使用し、「真鍮」を腐蝕させる方法であった。一方、『化学本論』第十編「原子分子論」でも、「鉄塩」（塩化鉄）と「重クロム酸」を使用し、「亜鉛或は銅板」（真鍮）を腐蝕する染色の作業工程が詳しく紹介されている。

写真に用ふるは主として臭化銀である。而しゼラチン版に於ては、同時に存在するゼラチンの為に臭素は吸収せられ、反応は不可逆的となる。（中略）

銀塩の反応は赤黄等波長の大なる光には感し難い。然るに之にエリスロシン、二沃素フリユオレシン等の色素を加ふれば、赤に近き色に感じ易くなる。此事実は Voge1 氏（1873）の発見に罹り、写真術の進歩に対し大なる効果を有つた。前に Eder 氏の反応が鉄塩の存在に於て感光性となる事を述べたが、上記の場合は之と同様である。（中略）兎に角斯の如き方法により任意の色に感ずる写真版を製し得るを以て写真術は大に進歩し、天然色写真をも作り得る様になつた。

ゼラチンを重クロム酸塩にて処理し乾かしたるものは、光に当れば水に不溶解性となる。（中略）此の反応も亦印刷術に広く応用せらるゝ。例へば亜鉛或は銅板の上に之を施し、光に当てたる後洗へば反応を起さゞりし部分のみ溶け去る。之を適当の薬品にて侵蝕して印刷に使用する。又不溶性となりたる部分は水に濡れず、脂油を吸収する。従つて光に当てたるものを洗ひ、之に脂油にてねりたる顔料を施せば、不溶性の部分にのみ付着する。

「機械」	『化学本論』
⑶真鍮へ漆を塗りつけては乾かしたり	ゼラチンを重クロム酸塩にて処理し乾かしたるものは、光に当れば水に不溶解性となる。
⑶重クロムサンアンモニアで塗りつめた金属板を日光に曝して感光させたり	亜鉛或は銅板（真鍮）の上に之を施し、光に当てたる後洗へば反応を起さゞりし部分のみ溶け去る。
⑴金属を腐蝕させる塩化鉄	之を適当の薬品（鉄塩）にて侵蝕して印刷に使用する。
⑵カセイソーダの溶液中に入れて軽部のすませて来た塩化鉄の腐蝕薬……洗い落す。	従つて光に当てたるものを洗ひ、
⑷無定形セレニウムの赤色塗	之に脂油にてねりたる顔料を施せば、不溶性の部分にのみ付着する。

表 3

表3は、「機械」における染色の作業工程を『化学本論』における染色の作業工程と対比したものである。

「機械」においては、「真鍮」に「漆を塗りつけては乾かし」て、「重クロムサンアンモニアで塗りつめ」、「感光させ」ている。この過程は、『化学本論』の「ゼラチンを重クロム酸塩にて処理し乾かした」後、それを「亜鉛或は銅板」（真鍮）の上に塗りつけ、「光に当」てるという説明に対応しよう。「機械」における「漆」は、水に溶解せず、脂油を吸収するという性質が『化学本論』の「ゼラチン」と等しい。「漆」を塗ってから「重クロムサン」を塗るか、「ゼラチン」と「重クロムサン」を混ぜてから、一緒に塗るか、という手順の差はあるものの、「真鍮」に「重クロムサン」を塗る点も一致している。その後、「塩化鉄」で金属を腐蝕させ、さらに、「カセイソーダ」で「すませて来た塩化鉄の腐蝕薬」を洗い落す。最後に、処置した金属の「脂油を吸収する」性質を利用して、「脂油」で練った赤色の「セレニウム」を顔料として、染色が完成する。

『化学本論』を参照することによって、「機械」における染色工程の全貌がより明確に理解できる。「機械」における染色に使用する化学物質とその作業工程は、『化学本論』の内容とほぼ一致している。横光が、『化学本論』に忠実に則って、「機械」における染色を描写したことは明らかである。

第三節　〈機械〉の正体

「機械」第五段に至って、〈機械〉が初めて登場する。

それからの私は化合物と元素の有機関係を験べることにますます興味を向けていつたのだが、これは興味を持てば持つほど今迄知らなかつた無機物内の微妙な有機的運動の急所を読みとることが出来て来て、いかなる小さなことにも機械のやうな法則が係数となつて実体を計つてゐることに気附き出した私の唯心的な眼醒めの第一歩となつ

て来た。（第五段落）

染色に携わり始めた「私」は、「化合物と元素の有機関係」を調べ、「無機物内の微妙な有機的運動の急所」を認め、「いかなる小さなことにも機械のやうな法則が係数となつて実体を計つてゐること」に気づく。ここでの「実体」とは、実験に使用する「化合物と元素」のことである。「私」は、「無機物内の微妙な有機的運動」の存在に、実験を通して想到する。「係数となつて実体を計つてゐること」とは、実験によって、「化合物と元素」が一定の化学反応を示していることである。「私」は、化学反応を支配する「機械のやうな法則」を感得する。「私」は、「実体」のない法則性を感得することを、「唯心的な眼醒めの第一歩」としている。

私は両腕で頭をかかへてまん丸くなりながら私のしたことが二人から殴られねばならぬそれほども悪いかどうか考へた。なるほど私は事件の起り始めたときから二人にとつては意表外の行為ばかりをし続けてゐたにちがひない。しかし、私以外の二人も私にとつては意外なことばかりをしたではないか。（中略）しかし事実がそんなに不明瞭な中で屋敷も軽部も二人ながらそれぞれ私を疑つてゐると云ふことだけは明瞭なのだ。だがこの私ひとりにとつて明瞭なこともどこまでが現実として明瞭なことなのかどこでどうして計ることが出来るのであらう。それにも拘らず私たちの間には一切が明瞭に分つてゐるかのごとき見えざる機械が絶えず私たちを計つてゐてその計つたままにまた私たちを押し進めてくれてゐるのである。（第七段落）

軽部・屋敷との乱闘後、現状を正しく理解することができない「私」は、人間の行動は、他人にとっては意表外のことであるから、相互に推測に基づいてしか行動できず、誰にとっても現実全体は「不明瞭」であると思考する。現実は、個人の理解とは関係なく進行するという論理である。「機械のやうな法則」に目覚めた「私」は、現実の進行についても、「一切が明瞭に分つてゐるかのごとき見えざる機械」の存在に気づき、その〈機械〉が「絶えず私たちを計つてゐてその計つたままにまた私たちを押し進めてくれてゐる」と感じ取る。「実体」のない「機械のやうな法則」は、「化合物と元素の有機関係」だけではなく、人間の全存在をも支配し、その行動を予め決定している。この化学的関係から人間の全存在

まで支配する法則性の理論的根拠も、『化学本論』に求められるようである。

『化学本論』第二編「エネルギー論」では、化学の「根柢的原則」である「熱力学」について論説している。

仕事を連続的に為す目的に造られたる装置は所謂機械である。連続的の働きをなす為には、その装置は或時間の後には再び元の有様に回り、同じ方法を繰返す様に造られて居なければならぬ。例へば進退又は回転等の運動は此の如き種類である。一般に或時間の後元の有様に回帰する過程を一の輪回行或は輪行（Cyclic Process）といふ。（中略）機械即或輪行に於て仕事をなす為には、何等か之に相当するものを外部より与へなければならぬ事が明である。而して多くの場合には熱を供給する。此様な事実より漸次にエネルギー（Energy）なる考が生じて来た。即ちエネルギーとは適当の方法により仕事に変じ得るものを云ふのである。熱、電力等は皆此種のものたる事は説明する迄もない。（中略）或物体系が外に向つて仕事をなさず、又他の種類のエネルギーの出入もなき場合には、其物体系の中に如何なる変化あるも全体のエネルギーは一定である。故に他と交渉なき物体系、即ち宇宙間に於けるエネルギーの量は一定であつて寸毫も増減し得られないといふ事になる。之をエネルギー不滅（Conservation of Energy）の原則といふ。（中略）

エネルギー不滅の原則を熱と仕事の場合に適用したものは即熱力学の第一則（First Law of Thermodynamics）である。

『化学本論』では、「仕事を連続的に為す」装置を「機械」と定義する。「連続的の働きをなす為」に、「機械」は、「或時間の後には再び元の有様に回り、同じ方法」を繰り返す必要がある。この過程は、「輪回行」或は「輪行」（Cyclic Process）と呼ばれる。「機械」が仕事をするには、「外部」から何らかの力が与えられることが必要である。ここに、「エネルギー」の概念が生じる。

「機械」が「外部」に向けて仕事をせず、エネルギーの出入がない場合は、内部において「如何なる変化あるも全体のエネルギーは一定」である。故に、「他と交渉なき物体系」、「宇宙間に於けるエネルギーの量は一定であつて寸毫も増

減し得られない」ことになる。これが「エネルギー不滅（Conservation of Energy）の原則」である。

『化学本論』では、「宇宙」を一個の「機械」とみなし、「宇宙間」のあらゆる運動を、「機械」のごとく働く「エネルギー」の「輪回行」として統合している。「化合物と元素の有機関係」から、人間の行動に至るまで、「宇宙」のすべての事象は、「エネルギー」の「輪回行」という「見えざる」力学的関係（「機械のような法則」）に従わなければならない。

『化学本論』によって初めて系統的に日本に紹介された化学の「根本的関係」としてのエネルギー論を摂取した横光は、「熱力学」に基づくその宇宙観に注目し、小説「機械」において、『化学本論』の用語と作業工程を利用するだけではなく、「機械」という概念も借用したと考えられる。

第四節　登場人物の狂人化

「機械」には、〈機械〉という奇怪な存在が出現するだけではない。登場人物たちも、〈機械〉に支配され、徐々に異常性を呈していく。

・初めの間は私は私の家の主人が狂人ではないのかとときどき思つた。観察してゐるとまだ三つにもならない彼の子供が彼をいやがるからと云つて親父をいやがる法があるかと云つて怒つてゐる。畳の上をよちよち歩いてゐるその子供がばつたり倒れるといきなり自分の細君を殴りつけながらお前が番をしてゐて子供を倒すと云ふことがあるかと云ふ。見てゐるとまるで喜劇だが本人がそれで正気だから反対にこれは狂人ではないのかと思ふのだ。少し子供が泣きやむともう直ぐ子供を抱きかかへて部屋の中を馳け廻つてゐる四十男。（第一段落）

・それは主人は金銭を持つと殆ど必ず途中で落して了ふので主婦の気使ひは主人に金銭を渡さぬことが第一であつたのだ。いままでの此の家の悲劇の大部分も実に此の馬鹿げたことばかりなんだがそれにしてもどうしてこんなにここの主人は金銭を落すのか誰にも分らない。（第二段落）

・いよいよ翌日となつてまた誰もが全く予想しなかつた新しい出来事に逢はねばならなかつた。それは主人が私たちの仕上げた製作品とひき換へに受け取つて来た金額全部を帰りの途に落してしまつたことである。全く私たちの夜の目もろくろく眠らずにした労力は何の役にも立たなくなつたのだ。然も金を受け取りにいつた主人と一緒に私を此の家へ紹介してくれた主人の姉があらかじめ主人が金を落すであらうと予想してついていつたと云ふのだから、このことだけは予想に違はず事件は進行してゐたのにちがひないが、ふと久し振りに大金を儲けた楽しさからたとへ一瞬の間でも良い儲けた金額を持つてみたいと主人が云つたのでつい油断をして同情してしまひ、主人に暫くの間その金を持たしたのだと云ふ。その間に一つの欠陥が是も確実な機械のやうに働いてゐたのである。（第七段落）

作品の冒頭、主人は、「金銭を持つと殆ど必ず途中で落して了ふ」「狂人」として設定されている。乱闘後、主人は設定通りに「受け取つて来た金額全部を帰りの途に落してしまつた」。一切が不明瞭な中、これだけは「予想に違はず」、「一つの欠陥が是も確実な機械のやうに働いてゐた」。「私」は、主人がいつも金銭を落とすということを、「機械のやうに働」く「欠陥」と理解している。「私」にとって、主人は最初から最後まで「狂人」であるが、この作品における「狂人」は、主人だけではない。

すると五日目頃の夜中になつてふと私が眼を醒すとまだ夜業を続けてゐた筈の屋敷が暗室から出て来て主婦の部屋の方へ這入つていつた。今頃主婦の部屋へ何の用があるのであらうと思つてゐるうちに惜しいことにはもう私は仕事の疲れで眠つて了つた。翌朝また眼を醒すと私に浮んで来た第一のことは昨夜の屋敷の様子であつた。しかし、困つたことには考へてゐるうちにそれは私の夢であつたのか現実であつたのか全く分らなくなつて来たことだ。

疲れてゐるときには今までとてもときどき私にはそんなことがあつたのでなお此の度の屋敷のことも私の夢かもしれないと思へるのだ。（中略）では暗室から出て来たのだけは矢張り屋敷であらうかそれともその部分だけは夢なのであらうかとまた私は迷ひ出した。しかし、主婦の部屋へ這入り込んだ男が屋敷でなくて主人だと云ふことだけは確に現実だつたのだから暗室から出て来た屋敷の姿も全然夢だとばかりも思へなくなつて来て、一度消えた屋敷への疑ひも反対にまただんだん深くすすんで来た。しかし、そういう疑ひと云ふものはひとり疑つてゐたのでは結局自分自身を疑つていくだけなので何の役にもたたなくなるのは分つてゐるのだ。（第六段落）

ある日目覚めた「私」は、夜中に屋敷が暗室から出て、主婦の部屋に入った記憶があるが、それが「私の夢であつたのか現実であつたのか全く分らな」い。部屋に入ったのは主人だと判明しても、「暗室から出て来たのだけは矢張り屋敷であらうかそれともその部分だけは夢なのであらうか」と、さらに「迷ひ出し」、「結局自分自身」を疑っていく。それ以前から、「私」は、「疲れてゐるとき」、「ときどき」夢と現実を分別できなくなっている。

私は屋敷の弁解が出鱈目だとは分つてゐたが殴る軽部の掌の音があまり激しいのでもう殴るのだけはやめるが良いと云ふと、軽部は急に私の方を振り返つて、それでは二人は共謀かと云ふ。だいたい共謀かどうかかう云ふことは考へれば分るではないかと私は云はうとしてふと考へると、なるほどこれは共謀だと思はれないことはないばかりではなくひょつとすると事実は共謀でなくとも共謀と同じ行為であることに気がついた。（中略）軽部に火を点けたのは君ではないのかと云つて笑つてのけるのだ。なるほどそう云はれれば軽部に火を点けたのは私だと思はれたつて弁解の仕様もないのでこれはひよつとすると屋敷が私を殴つたのも私と軽部が共謀したからだと思つたのではなからうかとも思はれ出し、いつたい本当はどちらがどんな風に私を思つてゐるのかますます私には分らなくなり出した。（第七段落）

三人の乱闘中、「私」は、軽部から「二人は共謀か」と疑われると、「なるほどこれは共謀だと思はれないことはない」、「共謀でなくとも共謀と同じ行為である」と納得する。乱闘後、「私」は、屋敷から「軽部に火を点けたのは君ではない

のか」と問われると、再び「なるほど」「弁解の仕様もない」と納得したが、その矛盾に気づいた「私」は、「いつたい本当はどちらがどんな風に私を思つてゐるのかますます私には分らなくなり出した」。「私」は、最早、理性で事実を判断できなくなっている。

酒に酔つてゐたのは私と屋敷だけではなくて軽部とて同様に酔つてゐたのだから彼がその劇薬を屋敷に飲まさうなどとしたのではないであらう。よしたとへ日頃考へてゐたことが無意識に酔の中に働いて彼が屋敷に重クロム酸アンモニアを飲ましたのだとするならそれなら或いは屋敷にそれを飲ましたのは同様な理由によつて私かもしれないのだ。いや、全く私とて彼を殺さなかつたとどうして断言することが出来るであらう。（中略）私はもう私が分らなくなつて来た。（第八段落）

作品の結末において、「私」は、記憶にない屋敷の死について、「無意識に酔の中に」自分が殺した可能性を否定できず、「私はもう私が分らなくなつて来た」。ここでは、記憶のないことさえ自分がしたことにしてしまうという、異常な思考に達している。

夢と現実を区別できない。理性で事実を判断できない。記憶のないことさえ自分の行動と思ってしまう。「機械」で、「私」は、現実の進行に則して、「迷ひ出した」「分らなくなり出した」「私はもう私が分らなくなつて来た」という認識不能を呈してゆく。〈機械〉に支配される登場人物の異常の原因と、〈機械〉の正体である「熱力学」の法則とは、どのように関わるのだろうか。

第五節　認識のメカニズム

『化学本論』第二編「エネルギー論」で、片山は、「認識の根本」を「熱力学」で説明しようとした。

エネルギー不滅の原則は分子原子の仮説とも重要なる関係を有して居る。分子説に依れば総ての物体の分子は常に運動して居る。而して其の速度が増せば分子の運動エネルギーが増す。之を吾人は温度が高まると感ずるのである。即ち熱は分子の運動のエネルギーであると見做す。（中略）

エネルギーを基として総ての現象を説明する様に考ふることも出来る。吾等が総ての現象を五感に依つて認むる手続を観察すると、皆エネルギーの変化に依ることを知る。例へば物を見るのは、其の物体より来たる光のエネルギーが目の網膜に働く作用である。固態を手にて触れて知るのは、皮膚の容積の変化によるエネルギーに基くのである。熱く感ずるのは熱のエネルギーの変化に依る。斯く観察し来れば吾等の認識の根本はエネルギーであることを知る。

斯くの如くエネルギーを基として自然科学を組み立つる方法をエネルギチク（Energetics）と云ひ Ostwald 氏及び Helm 氏等の唱ふる所である。此説によれば分子原子を仮定し力学を基礎としてエネルギー等を説明し、之により自然科学の系統を組み立てんとする企をアトミスチク（Atomistics）又はメカニスチク（Mechanistics）と云ふ。Boltzmann 氏其の他多数の物理学者の説く所である。此の二種の見地は何れも相当の理由のあることなれば、一方に遍せぬが可い。仮説も実験に撞著せざる範囲内にて自由に採用して進むことを穏当と信ずる。

『化学本論』では、「エネルギー不滅の原則」を紹介して、「熱は分子の運動のエネルギー」であると説明している。さらに、「エネルギーを基として総ての現象を説明」し得るとし、「総ての現象を五感に依つて認むる手続を観察すると、皆エネルギーの変化に依る」と総括する。「物を見る」とは、その物体の発する光のエネルギーが目の網膜に作用することである。触覚も皮膚の容積や熱のエネルギーの変化で説明される。高橋が指摘するように(11)、片山は、化学の領分を越えて、人間の「認識の根本」まで「エネルギー」に原因を求めたのである。

片山は、人間の「認識」まで、身体外のエネルギーと「五感」の接触によって生成されたものと考えていた。力学を基礎として、エネルギーによって自然科学の系統を組み立てる方法を「メカニスチク」という。この説によれば、人間の観

察も、エネルギーとして観察される「総ての現象」の一部として統合される。横光は、「文字について――形式とメカニズムについて――」[12]において、ほぼ原文に近い形で、『化学本論』「メカニスチク」の一節を引用していた。

総て現実と云ふもの――即ちわれわれの主観の客体となるべき純粋客観――物自而――最も明白に云つて自然そのもの――はいかなる運動をしてゐるか、と云ふ運動法則を、これまた最も科学的に、さうしてそれ以上、の厳密なる科学的方法は許され得ざる状態にまで近づけて、観測すると云ふ、これまた同様に最も客観的に、いささかのセンチメンタリズムをも混へず、冷然たる以上の厳格さをもつて、眺める思想――これをメカニズムと云ふ。

この創設者を Boltzmann と云ふ。彼は物質の根原をなす分子原子を仮定し、力学を基礎としてエネルギーを説明し、之れによつて自然科学の一切の系統を組み立てやうとした。彼の此の方法は、最初は Atomistics（原子論説）と云はれた。が、更に、転じて Mechanistics（力学説）と云はれた。

これが、目下、世界の思想史上に於て、最も進歩した思想になりつつあるメカニズムの最初である。それは自然科学は勿論、経済学、社会学、哲学、芸術、その他一般自然現象の観察方法としての、これ以上の正確さと、否、寧ろ、正確そのものがメカニズムであるがごとき、思想形態となつて出現しつつある。さうして、文学に於ては、形式主義がメカニズムの現れとなつて現れ出した。

横光は、「文字について――形式とメカニズムについて――」において、「機械」で使う「現実」という言葉を持ち出し、それを「自然」とも解釈し、その「運動法則」を科学的に観測し、客観的に眺める思想を「メカニズム」と呼ぶ。横光が、片山の「メカニスチク」の思想を、自然科学だけではなく、「経済学、社会学、哲学、芸術、その他一般自然現象の観察方法」として敷衍した点に注目したい。

われ〳〵はこれから、此のメカニズムを延長させて――此のわれわれの生存しつつある限り、他の何物よりも信じることの出来得る科学を根拠にして、一切の文学を批判しなければならない。

そこで、先づわれわれは、文学が文学であるがための、第一要素である文字について、考察しやう。

文字は物体である。さうして、それは、人間が製造した物体であると云ふことは、勝本清一郎、小宮山明敏両氏を除いては、何人と雖も、頷くにちがひない。しかし、文字は物体である以上、メカニズムに従へば、内容を持つてゐる。さうして、その文字と云ふ物体の内容は、どこから測定するか。即ち、われわれはその内容を、われわれの感覚と知覚とに従つて、その文字である物体の形式から、山なら山、海なら海と云ふエネルギーを感じるのだ。その場合、われわれが、その文字である物体の形式から、何の特別なるエネルギーをも感じないとすれば、その感じ得られなかつた。その者の感覚と知覚に、何らかの欠陥があつたので、それはその文字である物体としての形式そのものには、何の責任もないのである。即ち、文字としての形式はその彼の前に存在はしてゐるが、彼そのものにエネルギーを感じ得る能力がないために、内容が発生しなかつたのである。

これを云ひ換へると、内容とは、読者と文字の形式との間に起るエネルギーで、エネルギーは同一なる文字の形式からは変化せられず、読者の頭脳のために変化を生じると云ふことが明瞭になる。即ち、私が、内容とは形式から受ける読者の幻想であると云つたのは、これを意味する。それ故、同一物体である形式から発する内容と云ふものは、その同一物体を見る読者の数に従つて、変化してゐる。

『化学本論』の認識論を受容した横光は、それを「メカニズム」として「延長」させ、独自の認識論を展開させる。彼は、「文字は人間が製造した物体である」と主張しつつ、「感覚と知覚」に「欠陥」がなければ、人間は、「感覚と知覚とに従つて」、「物体」から、必ず「エネルギーを感じ」とるものであるとした。「エネルギー」は、「同一物体」から変化しない。観察者の「頭脳」の相違によって変化し、異なる「幻想」が生じる。それ故に、「同一物体」によって生じた「幻想」は、観察者の「数に従つて、変化」するものである。

『化学本論』の認識論は、身体外のエネルギーが身体表面の「五感」に到達する点に着目し、「認識の根本はエネルギー」と結論付けるものであった。それを受容した横光は、エネルギーが身体内に入った後の反応を思考したのである。その結果、彼は、観察者の「頭脳」がそれぞれ相違することを意識して、現実の認識は、「頭脳」の相違によって変化する

という独自の結論にたどり着く。

横光の認識論を総括すれば、身体外の「物体」は、「光」或は「熱」の「エネルギー」という形で、「目の網膜」或は「皮膚」などの「五感」を経由して、身体内に取り込まれ、最終的に「頭脳」の中に「認識」を形成する。「同一物体」に対する「認識」が、各「頭脳」によって相違することは、認識とは客観的・絶対的なものではなく、現実の運動と共に変化していく相対的なものであることを意味する。この認識論が小説「機械」にも反映されているのである。

独自の認識論を形成した横光は、「機械」において、登場人物の異常の原因を、次のように書いている。

この穴へ落ち込むと金属を腐蝕させる塩化鉄で衣類や皮膚がだんだん役に立たなくなり、臭素の刺戟で咽喉を破壊し夜の睡眠がとれなくなるばかりではなく頭脳の組織が変化して来て視力さへも薄れて来る。（第一段落）

「私」は、「塩化鉄」と「臭素」の影響で、「皮膚」「咽喉」などの「五感」が破壊され、「頭脳の組織」も変化して「視力」さえ薄れていく。

実際私たちの此の馬鹿馬鹿しい格闘も原因は屋敷が暗室へ這入つたことからだとは云へ五万枚のネームプレートを短時日の間に仕上げた疲労がより大きな原因になつてゐたに決まつてゐるのだ。殊に真鍮を腐蝕させるときの塩化鉄の塩素はそれが多量に続いて出れば出るほど神経を疲労させるばかりではなく人間の理性をさへ混乱させてしまふのだ。（第七段落）

乱闘の後、「私」は、その原因を、「短時日の間に仕上げた疲労」に求めている。特に「塩化鉄の塩素」が「神経」を疲労させ、人間の理性を混乱させたと述懐している。

確にあんまり主人の頭は奇怪だからだ。それは塩化鉄の長年の作用の結果なのかもしれないと思つてみても頭の欠陥ほど恐るべきものはないではないか。（第七段落）

いつも「機械のように」金銭を紛失するという主人の「欠陥」について、「私」は、「塩化鉄の長年の作用」が引き起こした「頭の欠陥」と解釈している。

いや、もう私の頭もいつの間にか主人の頭のやうに早や塩化鉄に侵されて了つてゐるのではなからうか。私はもう私が分らなくなつて来た。私はただ近づいて来る機械の鋭い先尖がじりじり私を狙つてゐるのを感じるだけだ。誰かもう私に代つて私を審いてくれ。私が何をして来たかそんなことを私に聞いたつて私の知つてゐよう筈がないのだから。（第八段落）

作品の結末において、「私」は、自分の異常を自覚し、「もう私の頭もいつの間にか主人の頭のやうに早や塩化鉄に侵されて了つてゐる」ことを疑っている。

「機械」の登場人物の狂人化の直接的な原因は、化学薬品による認知機能の低減にあった。化学反応は、薬品同士の間にだけ働くのではなく、化学薬品と人間の身体の間にも作用する。化学反応によって、身体構造は改変され、「頭脳の組織」は破壊される。最終的には、現実への認識さえ変化している。『化学本論』の「メカニスチク」を発展させ、認識の相対性という独自の思考に到達した横光は、化学薬品による「頭脳の組織」の損害が認知機能の障害をもたらすという構想の下に、「機械」を創作したのである。

第六節　結論

従来の研究は、「機械」に自然の法則性という主題を認めつつも、その法則性の理論的根拠は指摘されず、登場人物の狂人化との関係も解明されていなかった。一方、「機械」には、大量の化学用語が出現する。横光における化学知識の受容については、さまざまな議論が展開されているが、そうした知識と小説創作の方法を有機的に結びつけた研究は行われていない。本稿では、「機械」における化学知識と法則性の理論的根拠を『化学本論』に求めつつ、横光の思想と照らしあわせることで、「機械」の解読を試みた。

『化学本論』の出版によって、あらゆる現象を「機械」の如く働くエネルギーの「輪回行」とした宇宙観が日本に紹介された。『化学本論』で、片山は、身体外のエネルギーと身体表面の「五感」の接触を以て、「認識の根本はエネルギー」と主張する。それを受容した横光は、エネルギーが身体内に入った後の「頭脳」の相違に注目して、認識の相対性という独自の「メカニズム」思想に達した。「機械」は、「メカニズム」思想を小説化した作品である。

「機械」で、横光は、「私」に「化合物と元素の有機関係を験べ」させることで、化学反応の背後にある「機械のような法則」に目覚めさせる。混沌とした現実の進行につれて、再び「私」に人間の行動を予め決定する「見えざる機械」の存在に気づかせ、すべての現象を支配する「熱力学」の法則を浮かび上がらせた。一方、化学薬品によって「頭脳の組織」の侵された登場人物たちが、次々と狂人となっていく様には、横光独自の認識論が反映されている。「私」に「私はもう私が分らなくなつて来た」、「誰かもう私に代つて私を審いてくれ」と訴えさせるという「機械」の結末は、人間が客観的・絶対的に世界を認識できない存在であることを表している。

注、

（1）谷川徹三「文芸時評」（『新潮』、一九三〇・十）
（2）井上良雄「横光利一の転向」（『詩と散文』、一九三一・二）
（3）畑井俊幸「「機械」に見る横光利一の生態学的な眼」（『横光利一』、日本大学芸術学部文芸学科、一九七一）
（4）河田和子「横光利一の観念形成過程の一考察」（『古典研究』第十八号、一九九一・六）
（5）濱川勝彦「「機械」―戯画化された自意識の混迷」（『論考横光利一』、和泉書院、二〇〇一）
（6）横光利一「芸術派の真理主義について（中）」（『読売新聞』、一九三〇・三・十八）
（7）横光利一「現実界隈」（『改造』第十四巻第五号、一九三二・五）
（8）片山正夫の事績については、小野昌弘「化学本論と宮沢賢治」（『大阪市立科学館研究報告』第二十七号、二〇一

七）を参照。

（9）山本亮介「形式主義文学論の周辺」（『横光利一と小説の理論』、笠間書院、二〇〇八。初出「横光利一と自然科学――「形式主義文学論争」前後を中心に」（『文芸と批評』第八巻第九号、一九九九・五））

（10）高橋幸平「〈新感覚論〉から〈形式論〉へ――横光利一の文学論――」（『国語国文』第八十四巻第三号、二〇一五・三）

加藤夢三「新感覚派の物理主義者たち――横光利一と稲垣足穂の「現実」観――」（『合理的なものの詩学――近現代日本文学と理論物理学の邂逅――』、ひつじ書房、二〇一九。初出「新感覚派の物理主義者たち――横光利一と稲垣足穂の科学観――」（『横光利一研究』第十五巻、二〇一七・三））

（11）注（10）高橋論文。

（12）横光利一「形式とメカニズムについて」（『創作月刊』第二巻第三号、一九二九・三）

終章　横光利一の思想と文学

第一節　西洋摂取の姿勢

本研究では、テキストの検討を通して、横光前期文学の典拠と思想を追究してきた。その結論を総括してみよう。

第一章「横光利一「無常の風」論――天地人の文学」では、横光がエッセイ「無常の風」において言及する「フェリオの犯罪学」に注目し、その背後にあるエンリコ・フェリーの思考を探究した。フェリーは、十九世紀イタリアの犯罪学者・社会主義者である。自由意志の存在を否定し、犯罪を含むすべての人間の行動は、解剖学的体質と神経を経由する外部環境の影響と思惟し、社会と文明の変遷も自然の産物であると主張している。フェリーは、すべての物理現象を「前以て決定された所の原因の必然的結果」と考える。このようなフェリーの思想の根柢には、スペンサーの理論が存在する。スペンサーは、宇宙が常に流転の中にあると論じた。フェリーは、さらに、地質学者ライエルの「斉一説」を援用して、地形の推移を以て、自然の流転を論証している。

横光は、フェリーの思想を受容し、「斉一説」より新しいデイビスの「地形輪廻説」(The geographical cycle) を以て、自然の変遷を論証している。横光が「無常の風」で言及する「準平原の輪廻作用」は、「地形輪廻説」の術語である。「地形輪廻説」は、地形が、つねに地殻変動などの「内的営力」によって作られた突出と河流・氷河・波浪・風力・風化などの太陽エネルギーの変形である「外的営力」の削剥という動的均衡の中にあるとする。地形が隆起して、削剥される過程を「地理学的輪廻」という。フェリーの思想とデイビスの「地形輪廻説」を受容した横光は、自然の流転を強調しながら、個人と文明の運命が予め自然の流転に決められたことを表現したのである。

第二章「マルクスの審判」の典拠と改稿」では、「マルクスの審判」の主人公である判事は、無意識のうちに、さまざまな物事にその行動が影響されつつも、それを察知できず、正しい判決を下せずに苦しんでいた。「マルクスの審判」は、「無常の風」の約二年前に発表された作品であるが、「フエリオの犯罪学」との間に、犯罪という題材、人間の意志が環境に影響されるというテーマに共通性が見出せる。本章では、「マルクスの審判」が、フェリー「実証派犯罪学」の不本意犯罪の一節の翻案であることを指摘した。

「マルクスの審判」には、前稿にあたる執筆年次不詳の「殺人者」という未発表原稿が存在する。「殺人者」と「マルクスの審判」のテキストを詳しく比べることで、判事の心理が加筆されていることが判明した。「マルクスの審判」は、判事の内面を描くことで、環境に左右される人間の意志を審理の経過とともに読者に示し、「実証派犯罪学」の思想を個人の視点から表現した作品であった。

第三章「横光病妻小説の思想と方法」では、横光が、キミの病状悪化と死去以前に、すでに実体験に基づく父の死を描く小説を発表しているという、従来ほとんど顧みられてこなかった事実に注目した。親族の死を描く小説において、対象こそ変わるものの、一連の作品に一貫するキーワードは「運命」である。主人公たちは、死にゆく人間を見つけることをせず、不幸に対してあらがわない姿勢をとり、それぞれの運命論を展開していく。

一九二〇年代、横光は、西洋科学を理論的根拠として、「無常」「輪廻」などの東洋的運命観を理解した。個人の運命から出発し、社会の発展と人類の歴史さえ、自然現象の周期性に支配される「必然」とする思想が形成される最中に、横光は、親族の死を次々と経験し、親族の死をモチーフとする横光文学を創作したのである。

第四章「横光利一「機械」と『化学本論』」では、「機械」の典拠について、集中的に検討した。片山正夫『化学本論』は、「宇宙間」のあらゆる現象を「機械」の如く働くエネルギーの「輪回行」の結果と主張している。片山は、身体外のエネルギーと身体表面の「五感」の接触に注目し、「認識の根本はエネルギー」と主張した。

横光は、「機械」において、『化学本論』の化学用語を利用しつつ、『化学本論』に忠実に則って、「機械」における染色

を描写した。横光は、「私」に「化合物と元素の有機関係を験べ」させることで、化学反応の背後にある「機械のような法則」に目覚めさせる。混沌した現実の進行につれて、再び「私」に人間の行動を予め決定する「見えざる機械」の存在に気づかせ、すべての現象を支配する「熱力学」の法則を浮かび上がらせた。

第四章で言及したように、横光における西洋科学の受容については、近年、山本亮介・高橋幸平・加藤夢三などの研究者によって論じられている。横光が西洋科学を受容していた事実については、ほぼ定説化したと言えよう(1)。これらの先行研究をふまえつつ、本研究では、一九三〇年代以前の横光における西洋科学の受容を具体的に指摘した上で、それらの思想がいかに小説やエッセイに取り組まれているかという点に問題意識を定め、その解明を試みた。

第二節　東西洋思想の融合

本研究では、横光における西洋科学の受容を具体的に指摘してきた。しかし、横光が西洋科学を積極的に受容したことは、彼が西洋思想を全般的に受け入れたことと同意ではない。横光の科学受容をよりよく理解するため、その特徴を整理する必要がある。

序章「モダニズムの横光利一」では、横光がモダニズム文学を「馬鹿馬鹿しい名称」、新心理主義文学を「文学の邪道」「馬鹿なこと」と批判していた事実を指摘した。第一章「横光利一「無常の風」論――天地人の文学――」で論じたように、横光がフェリーの思想に強い影響をうけている。フェリーの思想は、当時盛行していたマルクス主義と対立するものであった。第二章「「マルクスの審判」の典拠と改稿」で分析したように、横光は、主人公の内面においてフェリー流の思考とマルクス主義的思考を対決させ、フェリー思想を勝利させるという結末を導いている。第四章「横光利一「機械」と『化学本論』」で分析の対象とした「機械」は、ネームプレートを製作する町工場が舞台である。製作所に住み込

んで働く主人公は、同僚との間に、互いに疑念や不満を覚え、衝突する。しかし、それらはマルクス主義的な労使関係や紛争とは全く異なる理由によるものであった。同時代のプロレタリア文学と比較すれば、「機械」がマルクス主義とは一線を画す姿勢で書かれたことは明らかであろう。

横光は、西洋思想のすべてに追従したわけではない。マルクス主義の存在を常に意識しつつ、マルクス主義とは対立的な思想を摂取しているようである。横光が、プロレタリア文学派と対峙し、幾度も応酬を交わしたことは周知の通りである。横光のマルクス主義批判を理解することは、彼の科学受容を理解する上で重要な手がかりを与える。

第一章で論じたように、横光のマルクス主義批判は、詰まるところ、「唯物史観」批判である。経済をすべての社会現象の基礎とするマルクス主義に対して、フェリーの影響を受けた横光は、人間の自由意志を否定し、経済制度も自然環境の産物とした。横光の科学受容は、自然と人間社会の統合を根幹とし、それと相容れない思想を排斥する特徴があるのである。

第一章と第三章「横光病妻小説の思想と方法」では、横光が無常・輪廻・家相などの東洋的思想をフェリーの思想やデイビスの理論を用いつつ再解釈し、作品化していたことを論じた。横光は、彼の思想に適う理論であれば、東洋・西洋を問わず、積極的に吸収し、融合させたのである。その際、各理論本来の領分を超えて、大胆な結合をはかり、独自の理論を形成していく。「無常の風」では、フェリーの社会学とデイビスの地形輪廻説を融合させ、社会の変遷を、地形の輪廻の産物とした。「美しい家」では、季節の交替と共に廻る植物の栄枯盛衰から発想し、人間の生命も周期的自然現象と解釈した。「機械」では、『化学本論』の認識論を受容し、エネルギーが身体内に入った後の「頭脳」の相違に注目して、認識の相対性という独自の「メカニズム」思想に到達した。

自由意志を否定し、人間の認識まで相対的存在として宇宙の「輪回行」への統合を試みた横光は、東西の思想を積極的かつ選択的に吸収し、融合させ、森羅万象を解釈できる理論の形成を目指してゆく。横光利一前期文学に見られる典拠と思想は、彼が真理を追求する道程に譬えられよう。

第三節　結論と展望

位田将司は、「横光利一の「転回」――「認識論」と「存在論」との対決――」において、横光の史的評価について、次のように整理している(2)。

横光利一の作家活動は、その活動時期により区分されている。本格的に作家活動を開始する『文芸時代』（一九二四・一〇～二七・五）を境にして、「新感覚派」あるいは「形式主義」と呼ばれ、「機械」（『改造』　一九三〇・九）が発表されるのを契機に「新心理主義」となり、ヨーロッパ外遊から『旅愁』（一九三七～四六）の連載にかけては「日本回帰」と解釈される。そしてこの区分は、現在も横光のテクストを解読する上で重要な指標となっており、例えば「新心理主義」という区分は、即座に「機械」と結びつき、「新心理主義」的なテクストとして解釈させる。

これらの文学史的区分は、千葉亀雄による「新感覚派」の命名、蔵原惟人を始めとするマルキシズム文学との、「形式」と「内容」に関する論争、伊藤整による「機械」を契機とした、「形式主義」から「新心理主義」という、横光の文学的転回を強調した「文学史」、そして敗戦後から激しくなる、ヨーロッパ外遊からアジア・太平洋戦争に及ぶ、横光に対する戦争協力への批判などから、複合的に構成されている。

位田は、従来の横光の史的評価を、「新感覚派」、「新心理主義」、「日本回帰」、「戦争協力」という四期に整理している。位田によれば、横光は、新興芸術や心理小説の流行に追随しつつ、日本国内の政治事情に合わせて変貌し、戦争にも協力した。ここには、流行を追って変貌する横光利一像がうかがえる。これに対して、本研究では、モダニストとしての横光利一像を、一九五〇年前後、伊藤整・平野謙などの文芸評論家によって作られたものとし、横光が一貫して西洋科学に根拠を求め、東洋思想を解釈し、独自の思考を展開したことを論じてきた。

後年における横光の「日本回帰」は、西洋の流行を追うモダニストを前提として成立する論点である。横光の前期文学における東洋思想の存在を確認した上で、「日本回帰」という評価にも再考が促されよう。新感覚派と呼ばれる約一年前、横光は、エッセイ「震災」において、次のように述べている(3)。

地震は地下で着々と予感を報じながらその周期を満たしてゐた。一度周期が満ちると同時に、人々は、恰も次の周期に満足を与へんとするかのごとく、直ちに再びその上に来るべき災害の予約を建設し始めた。さうして、彼らは互に次の恐怖時代を云ひ合ふとき、一様に彼らの口から流れる言葉は定つてゐた。「何に、我々は最早やそのときは死んでゐる。」と。――我らの民族の永久に繰り返して行く言葉は、此の恐るべき功利の言葉に相違ない。さうして、此の言葉が新鮮な力をもつて繰り返されれば繰り返されるにしたがつて、かく災害を大ならしめた科学と、自然の戦ひは益々猛烈になるであらう。吾々を負すものは地震ではない。それは功利から生まれた文化である。

横光は、作家として出発してまもない時点で、すでに地震を周期的自然現象とみなしつつ、科学と自然の関係、日本文明の本質を理解しようとしていた。それから十四年後の一九三七年、ヨーロッパ外遊後、横光は、小説「厨房日記」を発表する。横光はそこで主人公の口を借りて、次のように述べている(4)。

日本といふ国について外国の人人に知つていただきたい第一のことは、日本には地震が何より国家の外敵だといふことです。その外敵の侵入は歴史上に現れてゐる限りでは二百七八十回ほどあります。一回の大地震でそれまでの営営と築いて来た文化は一朝にして潰れてしまふのです。すると、直ちに国民は次の文化の建設を行はねばならぬのですが、その度に日本は他の文化国の最も良い所を取り入れます。一世代の民衆の一度は誰でもこの自然の暴力に打ち負かされ他国の文化を継ぎたす訓練から生ずる国民の重層性は、他のどこの国にもない自然を何より重要視する秩序を心理の間に成長させて来たのです。そのため全国民の知力の全体は、外国のやうに自然を変形することに使用されずに、自然を利用することのみに向けられる習慣を養つて来たのは当然です。

「厨房日記」の主人公は、ヨーロッパ人に対して、日本を、常に地震に作り直されている文明と紹介する。それ故に、

どの文明よりも、自然の本質に近いとしている。横光は、日本文学の優位性を主張するのではなく、西洋の科学技術があくまでも「自然を変形する」手段に過ぎず、人間は最終的に自然の周期性から逃れられないことを伝えようとしている。西洋思想に東洋文明の根拠を求めた横光は、ヨーロッパに赴き、自らの思想を検証した。横光がたどった道のりは、「日本回帰」ではない。東洋思想への執着は、彼の文壇登場期から一貫存在している。戦争協力に対する批判も、彼の「日本回帰」を前提として、日本の政治情勢に合わせて転向する作家という理解に基づく評価であり、見直される余地があろう。

横光の後期文学に対しても、前期文学への評価と同じく、外部の政治的環境からその本質を決めようとする傾向が認められる。それを解決するためには、やはりテキストの十分な検討がなされなければならない。本研究では、常に変貌する横光文学のイメージを覆したつもりであるが、今後はその後期文学を検証し、横光利一の、東洋思想をめぐる問題意識の一貫性を実証していきたい。

注、

（1）山本亮介「形式主義文学論の周辺」（『横光利一と小説の理論』、笠間書院、二〇〇八。初出「横光利一と自然科学――「形式主義文学論争」前後を中心に」（『文芸と批評』第八巻第九号、一九九九・五））

高橋幸平「〈新感覚論〉から〈形式論〉へ――横光利一の文学論――」（『国語国文』第八十四巻第三号、二〇一五・三）

加藤夢三「新感覚派の物理主義者たち――横光利一と稲垣足穂の「現実」観――」（『合理的なものの詩学――近現代日本文学と理論物理学の邂逅――』、ひつじ書房、二〇一九。初出「新感覚派の物理主義者たち――横光利一と稲垣足穂の科学観――」（『横光利一研究』第十五巻、二〇十七・三））

（2）位田将司「横光利一の「転回」――「認識論」と「存在論」との対決」（『早稲田現代文芸研究』第一号、二〇一一・三）

（3）横光利一「震災」（『文学春秋』第一巻第十一号、一九二三・十一）
（4）横光利一「厨房日記」（『欧州紀行』、一九三七・四）

付記

本稿中に引用した横光の文章は、全集未収録エッセイ「芸術派の真理主義について（中）」を初出誌に拠って引用した以外は、すべて河出書房新社版『定本横光利一全集』に拠った。但し、仮名遣は原文のままとし、旧漢字は新体字に改めた。横光以外の引用においても同じ方針をとった。